

東北支部年報

第 42 号

〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉 1-5-15

日本生命仙台勾当台南ビル 4F

TEL 022-265-3404

FAX 022-265-3405

E-mail: aij-tohoku@mth.biglobe.ne.jp

巻頭言

不確実性の時代を超えて

東北支部長 石田 壽一

東北地方太平洋沖地震から 11 年の年月が経ちました。防災・減災技術の進歩により、安心安全な生活環境の整備が進む一方、昨年 2 月の福島沖地震 (M7.3) に続き、1 年余り経過した本年 3 月に再び同規模の地震が起きました。東北新幹線の車両の脱線や橋脚損壊など、これまでにない被害を受け、首都圏でも広域の停電が発生しました。再び、平時から自然災害に対して決して油断することなく、常に注意を払って非常時に備える事の大切さを忘れてはならないとの思いを強くしました。コロナ禍下での生活も 3 年目に入りましたが、依然、感染対策は収束に至っておらず、また、ロシアのウクライナ侵攻に連携したグローバルなエネルギー危機の問題も浮上するなど、社会を取り巻く環境は、さまざまな複合的難題に直面しています。難しい時代に我々が生きていることは、指摘するまでもありません。いずれの問題も一筋縄では解決できませんが、歴史を省みると、感染症に苛まれた中世後期の暗い欧州地域に、その後、光に満ちたルネサンス文化が開花したように、難しい時代が次の大きなパラダイム・シフトの揺籃を形成することも、また、史的事実であります。東北地方は貞観地震以来、繰り返し超巨大地震(東北地方太平洋沖型)を経験し、その度にその時代の技術を持って困難を乗り越え、独自の文化を育み、継承してきましたが、時代を超えた災害技術・文化の伝承の意識を常に忘れてはならないと思います。

建築学会東北支部としてもこのような意識のもと、建築文化の発展と次代への継承を念頭におき会員の皆様と活動の輪を広げたいと考えております。各支所を中心に実施している「親と子の都市と建築講座」や工業系高校生のための「建築作品コンクール」、「都市景観シンポジウム」等は、建築の専門家だけではなく、身近な生活の中で普段から建築を考えるきっかけづくりに資する事業として重要です。「司法支援建築会議」も建築関係訴訟に関して社会の公共性に寄与する支援活動を地方裁判所と協力して行っています。今年度は男女共同参画事業として「ジェンダー・パイアスと建築」と題したトークイベントをオンライン配信で開催しました。3 回の企画を通じて、SDGs ゴールの重要な主題、多様性の問題について建築的議論を展開できればと考えております。昨年度、コロナ禍の影響で中止となった「みちのくの風 福島」ですが、今年度はオンライン配信にて「みちのくの風 山形」を実施することができました。3 1 1 から 10 年の節目に「震災復興 10 年とこれからの 10 年」東北探訪エクスカージョン・シンポジウムを企画し、銀山温泉にパネラーが集まり現地でも議論する魅力的な演出も取り入れ、東北各県からの参加者に現地探訪のライブ感を届けることができました。6 月開催の「みちのくの風 秋田」もオンライン配信となりますが、皆様との良き交流の場となることを祈念して巻頭言とさせていただきます。

もくじ

□巻頭言	1
□企画記事	2
□2021 年度司法支援建築会議東北支部活動報告	9
□第 42 回東北建築賞(作品賞)選考報告	9
□第 42 回東北建築賞(研究奨励賞)選考報告	14
□第 31 回東北建築作品発表会報告	14
□日本建築学会「作品選集 2021-2022」東北支部選考経過報告	14
□2021 年度日本建築学会設計競技東北支部審査報告	15
□2021 年度第 84 回東北支部研究報告会報告	15

□2021 年度第 7 回東北支部建築デザイン発表会選考報告	15
□2021 年度日本建築学会東北支部総会報告	16
□研究会活動報告	17
□支所だより	20
□支部役員会から	22
□支部役員名簿	24
□2021 年度事業報告	25
□2022 年度事業計画(案)	27
□法人・賛助会員名簿	29

(1) みちのくの風 2021 山形開催報告

前常議員 原田栄二

開催日: 2021年6月19日(土)、20日(日)

会場: Zoom上の会議室及び銀山温泉特設会場(特別企画セッション2)

1) 第84回支部研究報告会

発表題数: 56題/参加者: 188名

2) 第7回建築デザイン発表会

表題数: 6題/参加者: 37名

3) 特別企画 東北探訪エクスカージョンシンポジウム

オンライン開催となった「みちのくの風(東北支部研究発表会)」では、特別企画として上記表題のもとで4つのセッションからなる連続シンポジウムを開催した。

この企画は、中止となった昨年度大会から導入を予定していた「東北探訪エクスカージョン」を発展させたものであり、研究発表会場を離れ、開催地の現場に分け入って観察し、意見交換する機会を設けることを企図したものである。そのため、各セッションは、東北地方全般にも通じる今日的なテーマと議論の対象とする地域を設定することとし、特に開催担当支部である山形でのセッションについては、現地からの生中継により、東北各県の視聴者が現地を探訪しているような演出を目指した。

セッション①「災害調査連絡会×福島県沖の地震」

2021年2月13日(土)23時07分、福島県沖の深さ55km(暫定値)を震源とするM7.3(暫定値)の地震が発生し、福島県新地町などで最大震度6強を観測するなど、被害が発生した。

本セッションは、その直後から災害調査を行った東北支部災害調査連絡会による速報会である。

まず、設置された以下の5つの調査WGから調査結果の概要が報告された。

WG1【地震・地震動】汐満将史(山形大学) / WG2【建物】前田匡樹(東北大学) / WG3【設備】小林光(東北大学) / WG4【生活関連】小地沢将之(宮城大学) / WG5【歴史的建造物】長田城治(郡山女子大学)

次いで、源栄正人東北大学名誉教授から災害調査に求められる視点について発言がなされた。「災害調査」とは「被害調査」ではなく、被害のあったものと被害のなかったものの際を明らかにすることや、防災対策の基本は弱点の把握とその解消であり、その弱点は時空間で変化することを

念頭に置くことなど、示唆に富むコメントが共有された。

最後に質疑応答および総合討論が行われ、活発な議論が展開された。なお、「令和3年2月13日の福島県沖の地震災害調査速報」は、日本建築学会「建築書店」において定価1,000円で通信販売されている。[佐藤健/東北大学]

セッション②「文化財保存まちづくり × 山形県尾花沢市 銀山温泉」

シンポジウムは古勢起屋別館前の橋上に特設会場を設置して現地中継をおこなった。はじめに、山形大学の永井康雄教授より、山形県内における文化財・建築と町並みの景観がどのように継承され、現況に至っているのか説明があった。続いて銀山温泉・銀山荘の小関健太郎社長より、これまでの銀山温泉の景観が形成された経緯と、現在と今後の取り組みを紹介いただいた。山形県文化財担当の高橋詩織氏からは、県の取りくみと文化財と景観による地域づくりにどのように関わるか。文化財保存活用大綱や文化財カルテなどの新しい取り組みを紹介いただいた。尾花沢市専門員大類誠氏より銀山温泉の古絵葉書をもとに町並みが形成された時期と変容について紹介いただいた。山形大学の高澤由美助教からは、観光地としての銀山温泉の位置づけと、周辺観光地など広域で連携する必要があることを指摘いただいた。文化庁文化財調査官の梅津章子氏から、伝統的建造物群保存地区の意義と現状を説明いただき、保存活用には住民と市町村が主体となる必要性を説明いただいた。

また、山形支所長の相羽康郎氏より、シンポジウム開催の経緯と意義について説明いただいた。議論では、文化財・建築や景観を保存していくだけでなく、活用には行政の役割と大学やヘリテージマネージャー等の活動、住民意識の継承が肝要であることが共有された。[濱定史/山形大学]



セッション③「地域包括ケア×宮城県石巻市」

震災後石巻市地域包括ケアセンター長を担ってきた長純一医師、コミュニティナースとして北上町の地域医療の最前線にいた平野亜紀看護師、建築計画の視点から復興の現場を見た佃悠東北大学准教授、北上町にっこり団地の災害公営住宅計画に携わった手島の4者により、地域包括ケアの先進地とされている石巻市の現状について議論を行った。国の福祉政策の転換により、福祉とまちづくりと住環境が密接に結びつき、それが広域の医療体制とネットワークさ

れなければならぬマクロな現状と、現場の視点からは、専門性の垣根を超え、地域との人間関係の構築こそが重要であるとの指摘が浮かび上がった。両方の視点共に、専門性の垣根を超えた関係性（ネットワーク）の再構築を重視していることが興味深い。[手島浩之／日本建築家協会]

セッション④「原子力災害復興×福島県檜葉町」

冒頭、檜葉町職員松本昌弘から震災直後の全町避難・避難指示解除から数年を経て、ようやく他のまちと同じ悩み（少子高齢化など）に取り組み始めた現状についての報告があり、一社ならはみらい職員森雄一朗は移住者の立場から現在の被災地の状況を語った。みんなの交流館「ならは CANvas」の設計者である手島からWS時の様子が語られ、建築の持つ象徴性が必要とされる瞬間が浮かび上がった。震災後から学生を中心とした被災地支援をバックアップしてきた山口洋典立命館大学教授からは、「被災地の課題をどう私ごとにするか」との投げ掛けが全体を貫く大きなテーマとなり、ファシリテーターを務めた窪田亜矢東京大学特任研究者からは「当事者性」というキーワードが引き出され、議論を締めくくった。[手島浩之／日本建築家協会]

今回の特別企画は、来年度以降もオンライン開催の可能性が残される中で、「みちのくの風」の新しいフォーマットを試行する機会でもあった。

東北支部は低密度な地域に拠点が分散しており、予算や距離的な制約によりコロナ問題発生以前からすでに役員会などで一部メンバーのWEB参加を行っていた。だが、今回の実施により、必ずしも対面に拘らずオンラインを積極的に活用することで、むしろ分散する各地域の異なる専門性を持つメンバーによる議論が活性化する可能性を確認することができたと思われる。

大会の企画・準備・運営・実施にご協力いただいた関係諸氏に、この場を借りて改めて御礼申し上げる。[原田栄二／東北大学]

(2) 災害委員会支部企画報告

東日本大震災復興シンポジウム「みやぎボイス 2021～東日本大震災から10+1年目を迎えて、私たちは何を語るすることができるのか～」

櫻井 一弥

○企画概要

名称：東日本大震災復興シンポジウム「みやぎボイス 2021～東日本大震災から10+1年目を迎えて、私たちは何を語るすることができるのか～」

開催日：2021年7月3日（土）12：00～18：30

会場：せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア + Zoom 会議

対象：一般市民、東日本大震災の復興に関わる地域住民、行政担当者、大学関係者等

参加者：202名（うち、160名はZoomによるオンライン参加）

○背景・目的

「みやぎボイス」は、年に1回、東日本大震災からの復興に関わる様々な立場の方々が一堂に会して議論することで、震災復興の現在を確認し、地域の課題を共有する場として機能してきた。今回の「みやぎボイス」では、「東日本大震災から10+1年目を迎えて、私たちは何を語るができるのか」をテーマに議論を進めた。前回のテーマである「復興検証の検証」を踏まえながら、議論の展開と深化を企図したものである。

○内容と成果

例年「ラウンドテーブル」という議論形式により、登壇者も聴衆も一体となった課題の共有と気づきを与える場として実施してきたが、今回は前回同様、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、遠隔地から参加する登壇者と一般参加者については、オンライン会議ツール zoom を用いたリモート参加とした。登壇者は現地とリモート併用、一般参加者の現地受け入れは無しとし、事前登録制の完全リモートとした。

前半3テーブル、後半3テーブルの合計6つのテーブルにおいて、広くて深い議論が展開された。

前回の実績があったために、リモートとはいえ話し手と聞き手の住み分けが明確になり、大変聞き取りやすい環境を実現することができた。リアルとリモートを併用して復興とまちづくりに精力的に関わられている各分野の方々に参集いただき、多様な意見交換と示唆に富む知見の共有ができた。

当日は複数の新聞社の取材と後日の報道があった。

(3) 2021年度「親と子の建築講座」～リモート「スマハキット」でスマートハウスの実力を体感しよう～活動報告（秋田会場）

菅原 正則

日時：2021年7月31日、10:00～12:00（午前の部）および13:30～15:30（午後の部）

開催方法：オンライン（Zoom）

講師：菅原正則（宮城教育大学 教授）

長谷川兼一（秋田県立大学 教授）

西川竜二 (秋田大学 准教授)

司 会 : 長谷川兼一 (前出)

参加者 : 午前4名 (小学生2名、中学生2名)、午後4名 (小学生3名、中学生1名)

趣 旨 (案内チラシより) :

これまで身近に使われてきたモノに、センサーやデータ通信・処理の技術を加えて「スマートに (賢く)」すると、便利で無駄のない動きをするようになります。「スマートハウス」は、主に電気エネルギーを無駄なく使用するしくみを持ち、自然エネルギー利用に役立ちます。それは地球環境を守るだけでなく、災害などでライフラインが途切れても生活を支える役割を果たします。この講座では、このような住まいをスマートにする意味について学び、その初歩的なしくみを電子部品のキットで確かめます。

内容 :

本講座は、秋田県立大学システム科学技術学部 創造工房委員会の主催による第14回夏休み科学教室「創造学習」/「おうちで創造学習」への出展という形態で実施された。新型コロナウイルス感染対策のため、対面とオンライン (Zoom) を併用して開催された。秋田県立大学の運営スタッフが、前日までに参加者との通信テストを行った。実施メニューは、午前の部、午後の部とも同じである。

(1) 開会のあいさつ (長谷川)

講座の開催趣旨が説明された。

(2) スマートハウスと「スマハキット」の説明 (菅原)

ここでは、スマートハウスが1980年代のアメリカにおいて構想された経緯や、現代の自然エネルギー利用のために普及する意義、そしてHEMSを中心とした仕組みについて説明した。「スマハキット」はスマートハウスの仕組みを安価な電子回路で簡易に再現した建物模型教材であるが、そのオンライン版であるリモート「スマハキット」を使用すること、そしてそれは宮城教育大学に設置され、ほかの講師がそれぞれの大学に居る体制で、ネットワークでつながれることにより講座が開催されていることを最後に説明した。

(3) リモート「スマハキット」の使い方 (菅原)

「スマハキット」は、LEDとCds照度センサーを組み込んだ建物模型、センサーボード (ちっちゃいものくらぶ NanoBoard AG)、ノートパソコンで構成されている。LEDへの電源はリレー回路を通じて供給され、Scratchの自作プログラム (ON/OFFモード、手動可変モード、HEMSモードの切り替えと、計測機能を持つ) により出力制御が行われる。コンデンサによる蓄電回路を加えることもできる。参加者は、Zoomの「リモート制御」機能を用いて、リモートで「スマハキット」を使用できる。自分が操作した結果については、Scratchの画面上で測定値がモニターできるだけでなく、写真1のようにWebカメラで模型内の照明が光る様子で確認できる。

昨年の講座において使用したオンライン版では、音声信号に連動した発電の仕組みがうまく稼働しなかった。そこで今年度は、秋田市における夏至ごろの2日間における日照時間 (2021. 6. 20~21、気象庁ウェブサイト掲載の10分間隔値) から発電量を決めるように改良した。また、「(5) スマートハウスに挑戦！」において、スマートハウス (HEMSモードの建物模型) と同時に参加者 (チャレンジャー) が建物模型を操作して、写真2のようにその結果を比較できるようにした。

これらのことを一通り説明してから、5分休憩に入った。



写真1 「(5) スマートハウスに挑戦！」におけるリモート「スマハキット」の設置状況



写真2 「(5) スマートハウスに挑戦！」の画面

(4) スマートハウスの実力を実感しよう (菅原、長谷川、西川)

ここでは、Zoomのブレイクアウトセッション機能を用いて、3つのセッションに講師と参加者が分かれ、それぞれ参加者のペースに合わせて説明や操作をしながら進行した。リモート「スマハキット」が設置されている宮城教育大学には、電子回路の繋ぎ替えやトラブル対応のための学生がサポートに付いた。

電源とLED制御の組み合わせについて、①安定電源+ON/OFF、②安定電源+手動可変、③変動電源 (太陽光発電・コンデンサなし) +手動可変、④変動電源 (太陽光発電・コンデンサ付き) +手動可変、⑤変動電源 (太陽光発電・コンデンサ付き)+HEMS、の5条件について実験を行った。参加者は1分チャレンジ (1分間でどれだけ目標の明るさに調整できるかを競う) の結果を比較することにより、蓄電 (コンデンサ) やHEMSを用いた際の効果を体感した。

(5) スマートハウスに挑戦！ (菅原)

Zoomのブレイクアウトセッション機能を終了して、全員

が再度集まった後は、④変動電源（太陽光発電・コンデンサ付き）＋手動可変、の組み合わせにおいて安定的に目標の明るさにできるか、スマートハウスに挑戦してもらった。成績1位の参加者には秋田県立大学特製エコバッグ、参加者全員には秋田県立大学特製のクリアファイルと布袋を贈呈した。

(6) まとめと閉会（長谷川）

講座の参加への感謝を述べて終了した（写真3）。



写真3 閉会の様子（プライバシー保護のため、映像を加工しています）

今年度は、昨年同様オンライン開催であったが、そのときのトラブルを踏まえて内容を見直したので、順調に実施できた。新型コロナウイルスへの感染対策としてこの2年間はオンライン開催せざるを得ず、思いがけなく新しい実施方法を確立できたと考えている。しかし一方で、この期間に、対面で開催する場合の感染対策も社会的に定着してきた。子ども向けイベントは、1カ所に集まって賑やかに開催してこそ意義があると言えるので、次年度は対面を想定した企画を予定している。（菅原正則、長谷川兼一、西川竜二）

(4) 2021年度「親と子の建築講座」 ～自分だけのへやづくりを仮想空間 でかなえませんか？ーイマジナリー ー・アーキテクチャーⅡー活動報告 (宮城会場)

菅原 正則

日時：2022年1月23日、13:00～15:00

開催方法：オンライン（Zoom）

講師：菅原正則（宮城教育大学 教授）、佐藤大地（宮城教育大学 4年生）

参加者：3名（小学5～6年生）

※募集対象は、小学生（保護者の支援が必要）、中高生、または教育関係者で、ブラウザを使用できるパソコンと、zoomを使用できる機材（パソコン、スマホ等）の両方をご用意できる方々、とした。定員は先着5組。

趣 旨（案内チラシより）：

「居心地のいい部屋」ってどんなの？

カラフルなパステルカラーに囲まれている？

大好きな、あのキャラクターのぬいぐるみでいっぱい？

アンティークでどこか懐かしい香りがする？

それとも、余計なものが何もない無機質な空間……？

この講座は、オーストラリアのアーティスト、ララ・トゥマック（Lara Tumak）さんによるイマジナリー・アーキテクチャーに着想を得たものです。居心地のいいと思う自分だけの部屋を、パソコン内の仮想空間で作ります。

内容：

オンライン開催に先立って、ミーティングURLをメールで送信しておき、Zoomに接続できることとカメラが使えること、そしてもう1台のPCでSpatial（仮想空間を提供するサービス）のウェブサイトが開けることを、開催日の4日前までに確認した。また開催前日にも参加者へメールを送信し、開催日時とミーティングURLを改めて通知するとともに、運営側で事前に作成した個別のSpatialのID、パスワード、room（Spatialに作られる1つの仮想空間）のURLを提供した。

当日は、申し込み者全員が無事Zoomへ参加できた。まず、参加者に許可を得て、録画を開始した。注意事項の伝達やアンケートの記入依頼をした後、1人ずつ自己紹介（名前、学年、好きな教科または嫌いな教科）をして頂いた。このときの内容から、3名の参加者はそれぞれ仙台市、神奈川県、広島県に在住していることが分かった。

以下、段階ごとに内容を示す。

(1) はじめの説明

今日のスケジュールを示した後、Lara Tumak氏が2017年にメルボルンで開催したインスタレーション展示

「Imaginary Architecture」の事例を紹介した。それは、お菓子などの空き箱の中に画材や材料を使用しながら風景を制作するものであったが、この講座では仮想空間でへやづくりすること、すなわち「バーチャル・イマジナリー・アーキテクチャー」であることを伝えた。仮想空間では、遠くにいる人とでも「同じ場所」に居る感覚を得られる。そしてそれを十分に生かせるのは、ゴーグル等のVR機器を使用することである。しかし、目や脳の発達に影響を与える恐れがあるほか、装着性の問題により、VR機器メーカーでは13歳や18歳など、使用可能年齢の下限を設けている。この講座では、機材準備の難しさもあったが、年齢制限への配慮から、PC画面で仮想空間を体験してもらうことにしたことも伝えた。



写真・教室の3Dスキャン画像をバーチャル空間内に設置した様子

(2) 操作の練習

ここではまず Zoom に講師の Spatial 画面を映し出して、自分のアバターをマウスやキーボードで操作する方法や、room 内に配置できるオブジェクト（立体図形）を読み込む方法を説明した。その後、Zoom へ参加している状態のまま、もう 1 台の PC で Spatial にログインし、参加者ごとに指定した room に分かれた。講師 2 名と学生サポート 1 名も手分けして 3 か所の room に 1 名ずつ入室し、一連の操作練習や次のへや作りの補助をした。

この後、5 分休憩の時間があることを呼び掛けたが、休憩をとる参加者はなかった。



写真…実施の様子（プライバシー保護のため、映像を加工しています）

（3）自分だけのへや作り

参加者それぞれのペースで、自分にとって「居心地のいい」と感じられる部屋を room 内に作って頂いた。room 内には、事前に 3.0m×3.5m×高さ 2.5m の部屋に相当する立体図形だけが配置されており、その中に家具や置物などインテリアのオブジェクトを配置していくというものである。オブジェクトには予め Spatial に備わっているものと、使用者が独自に用意するものがある。独自のオブジェクトは、SketchUp で制作した立体を OBJ 形式のファイルとして用意した。講座実施中に要望があれば、それに沿ってオブジェクトを作成する予定であったが、参加者からの要望はなかった。

参加者それぞれが集中して作業に取り組んだが、作業時間として予定していた 40 分では終了できなかつた。終了予定時刻から 30 分ほど過ぎたところ、作業を切り上げてもらうよう促し、へや鑑賞ツアーへ移った。



写真…参加者が作成した「居心地のいい部屋」

（4）へや鑑賞のツアー

ここで HoloLens という MR 機材を起動して Spatial の room に入室し、その中に見える映像をミラーリングによって PC に画面同期させることによって、Zoom で全員が見られるようにした。HoloLens で参加者一人一人の room をめぐると、作成された部屋を、一人称視点であたかもそこに入り込んだかのように見ることができる。

参加者には、作った部屋のタイトルと、どのような点を工夫したか説明して頂いた。タイトルは「楓と猫の部屋」「広々とした部屋」「シンプルな部屋」が挙げられた。作品が紹介される毎に、講師からそれぞれコメントを述べた。この講座はオンライン開催であり、PC 2 台を準備して頂く手間をお掛けしたことや、その一方で遠方からの参加があったことへの感謝を述べて、終了した。



写真…HoloLens を装着したときの「楓と猫の部屋」の見え方（一人称視点）

参加者の感想：

講座終了時に、参加者にアンケートを実施し、3 名すべてから回答を得た。

○講座の内容はいかがでしたか？ 感じたものに○をつけて下さい。

回答は、大変満足 3、満足 0、やや不満 0、不満 0 であった。企画・実施担当者として喜んでいる。

○よかった点、わるかった点をおしえて下さい。

回答は、「分かりやすくよかった」「いろいろなアイテムを先生方が準備してくれていたのも、とても楽しく取り組みました」など、よかった点を挙げて頂いたが、「事前にある程度 Spatial の予習ができるような資料があれば、もう少しスムーズに進められた」との指摘もあり、今後の課題である。

○今後、今回のテーマのような講座があれば参加してみたいと思いますか？

回答はすべて「参加する」であった。

○他にどのようなテーマの講座があれば参加したいと思いますか？

「実際にある特徴的な建築について紹介してもらう講座や世界遺産などの建築について教えてもらう講座」という回答を頂いたので、他の専門家との協働も検討したい。

○そのほかに、ご意見・ご感想をおしえて下さい。

回答には、「すごい大変だったけど楽しかったです！」「あまりパソコンに慣れていないので思うようにアイテムを動かさず、たくさん手伝ってもらいましたが Spatial をもって使ってみたいと思いました。自分の作った物だけでなく、他の人の作品を見るのも新しい発見があって良かったです。」と、この講座が参加者の世界を広げる有意義なものであったことが感じられた。

今年の講座は副題を「イマジナリー・アーキテクチャー II」として、昨年の講座の続編と位置付けているが、実施内容は仮想空間の体験を主軸としたものであった。また、大学の卒業研究でもあったため、開催時期は 1 月下旬となってしまった。このように、内容や時期が募集対象の「親と子」の需要に適合しなかつたようで、参加申し込みはあ

まり振るわなかった。しかし、関東や西日本からの参加者があったことから、オンラインの普及と利点を強く実感した。

仮想空間（メタバース）を通じて創作活動をし、情報交換や教育をすることが当たり前になる時代は、移動時間や実施場所の確保、省エネルギー、プライバシーなどの観点から、そう遠くはないと考えられる。VRゴーグルの使用は、発達段階の人体への影響が心配されるが、それによく配慮しながら仮想空間技術をどのように利用できるか、検討を進められればと考えている。（文責 菅原正則、佐藤大地）

(5) 2021年度「親と子の建築講座」 ～親子で学ぼう やさしい建築構造力学講座～活動報告（福島会場）

福島支所長 渡邊 佳文

1 開催趣旨

小・中学生を対象とした建築構造に関するワークショップを通し、建築を楽しく知ってもらい、建築への興味の醸成を図ることを目的とした。

2 開催概要

日時：令和4年1月8日（土）14:00～16:30

場所：福島県教育会館

講師：福島県土木部建築住宅課 山下 竜一

参加者：小学生親子等9名（4チーム）

3 建築講座

(1) 座学

構造力学の基本となる「建築構造とは何か」について、座学を行った。始めに、住宅の軸組模型を使用し、耐震について説明があった。次に、建物はどのような素材でできているか、どのような力に弱いかなど講師がクイズにし、イラストなどで分かりやすく説明した。また、アーチ、ラーメン、トラスなど様々な梁の種類や特徴を写真で紹介し、参加者は建築構造を身近に感じながら学んでいた。子ども達は、手を挙げて積極的に自分の考えを発言するなど、親子で楽しく建築構造を学んでいる雰囲気が印象的だった。



耐震構造を学ぶ参加者

(2) ワークショップ

座学後、一枚のボール紙で70cm離れた台に架ける「梁」を製作し、吊り下げられるおもりの重さを競った。スタッフからルールの説明を受けた後、参加者は4チームに別れ、製作する梁の形や作業手順を話し合った。各チーム協力しながら検討・設計・製作を進め、アーチ型やトラス型など、4チーム全てが工夫を凝らした個性的且つ素晴らしい梁を完成することができた。



ワークショップの様子

(3) 計測

計測前に、製作した梁がどのくらいの重さに耐えられるか予想重量と工夫した点を設計者である子ども達自身が説明した。計測では予想した重量を超える梁、予想に反し破壊した梁もあり、その度に大きな歓声が上がった。梁の破壊が進み、会場にいる全員が「もう壊れるだろう」と予想した場面では、増え続けるおもりに耐える梁に対し、拍手が起こるなど大きな盛り上がりを見せた。



計測の様子

(4) 表彰・講評

事務局から結果を発表し、各チームの子ども達一人一人に成績をたたえた賞状を授与した。表彰後、講師から各チームの講評があり、それぞれの特徴

や工夫点などを参加者で共有した。



賞状授与

4 おわりに

参加者した子ども達から、「楽しかった」、「もう一度挑戦したい」などの心強い感想が得られた。座学で学んだことをワークショップに生かすなど、本講座の目的である建築構造を楽しく学び、実践し、体感することができた。また、今回の優勝者は2連覇という記録を残したため、他チームから「次は負けない!」、「来年リベンジする!」と次回を期待する声もあることから、今後も、より効果的な企画となるよう更なる深化を試みたい。

最後に、本講座の開催に当たり、御協力いただいた関係団体及び関係者の皆様に深く感謝申し上げます。



全員で記念撮影

2021 年度東北支部男女共同参画事業 活動報告

常議員 佃 悠

イベント名：ジェンダー・バイアスと建築 第1回建築設計競技の現場から

日時：2022年3月9日（水）17:30～18:50

実施形態：Zoomによるオンライン

主催：日本建築学会東北支部

プログラム（敬称略）

全体司会：佃悠（東北大学 准教授）

17:30 開会

開会挨拶：石田壽一（東北支部長、東北大学 教授）

主旨説明・登壇者紹介：佃悠（前出）

17:40 事例紹介

小野田泰明氏（東北大学 教授）

赤松佳珠子氏（Cat パートナー、法政大学 教授）

18:00 対談

小野田泰明氏（前出）

赤松佳珠子氏（前出）

司会：佃悠（前出）

18:30 質疑応答

18:45 閉会挨拶：石田壽一（前出）

18:50 閉会

活動報告

2021・2022 年度にかけて3回の実施が予定されているトーク・イベント「ジェンダー・バイアスと建築」の第1回として「建築設計競技から」をオンラインにて開催した。当日は全国から35名が参加者した。

東北支部長の石田より挨拶、常議員の佃より本イベントの主旨を説明した後、登壇者の小野田泰明氏、赤松佳珠子氏よりこれまでのご経験の中で出会ったジェンダー・バイアスの事例についてご紹介いただいた。小野田氏からは建築設計競技の実施側で委員等を担当されたご経験から、組織の中に男女別なく優秀な人はいるが、そもそも男性率が高いということで、関係者のバランスが悪くなりその影響は少なからずあること、委員でも女性ということで一部のみに依頼が集中してしまい、負担が大きくなってしまふこと、赤松氏からは事務所経営者としての視点から、パフォーマンスをあげるという点では、男女の別はなく優秀な人を採用しており、むしろ事務所に合っているかどうかの大事であること、女性が現場に行くようになった頃には現場側にも戸惑いがあったが、今は産休育休の仕組みも整え、周りもサポートしながら仕事を続けられるような体制が事務所としても求められているといった話題が提供された。その後、紹介いただいた事例をもとに、小野田氏、赤松氏による対談を佃の司会で進めた。男女別なく長時間労働を前提としない働きやすいあり方を社会全体で目指すこと、そのためには教育の部分から変わっていくことも重要であること、地方自治体では建築設計競技を行うということ自体へのハードルが高い部分があり、時間をかけてよりよいあり方を探る必要性があることなどが示された。チャット等を通して参加者からこれまでの経験に基づくコメントが寄せられ、建築業界におけるさまざまなジェンダー・バイアスの視点を共有した。最後に石田東北支部長より挨拶があり、閉会した。

終了後にはアンケート調査を行い、28名（回答率80%）から回答があった。全体的に満足度は高く、「建築設計協議で審査員、応募者どちらも経験されている登壇者ならではの興味深い話だった」、「働き方の変化と合わせて組織の中での障害を取り除いていく必要性を改めて認識した」などのコメントをいただいた。アンケートに寄せられた「今後

取り上げてほしいテーマ」なども参考にしながら、建築業界でのジェンダー・バイアスを考える有意義なイベントを残り2回で企画したいと考えている。

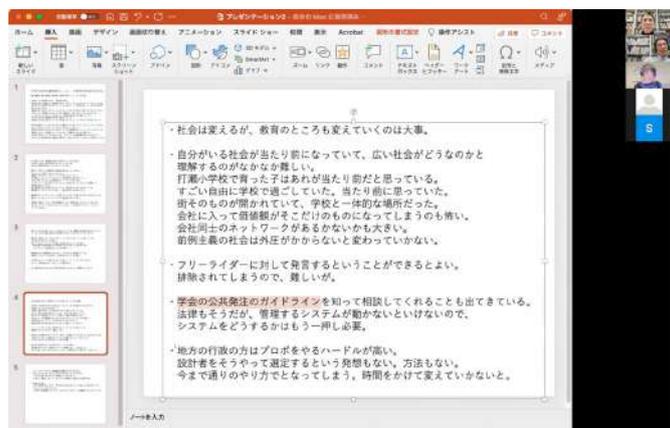


写真1 トーク・イベントの様子

2021年度司法支援建築会議東北支部活動報告

運営委員長 吉野 博

司法支援建築会議の東北支部は2019年4月1日に設立されました。その年の5月11日に東北支部発足記念講演会を開催し、その後、少なくとも毎年、支部総会の際に講演会を実施することとしました。2020年度は、5月16日の支部総会の直前に、「東北地方の各地における建築紛争の現状と課題」と題するシンポジウムを開催する予定でした。しかしながら、新型コロナウイルスの蔓延のために中止といたしました。

2021年度は、「日本建築学会司法支援建築会議東北支部第1回講演会」を2021年5月15日にリモートで開催し、以下の三つの主題解説を頂き議論しました。すなわち、主題解説1「青森県における建築紛争事例について」加藤 彰 青森県建築士事務所協会会長、主題解説2「岩手県における建築紛争事例について」佐々木章 岩手県建築士事務所協会副会長、主題解説3「宮城県における建築紛争事例について」中居浩二運営委員、の通りです。

また、2022年3月22日には、仙台地方裁判所齊藤充洋判事を学会支部の事務局にお招きし運営委員との懇談会を開催し、建築紛争に関わる現状や未然防止策に関してご教示いただき、意見交換いたしました。会場での参加者は5名、リモートでの参加者は4名でした。

運営委員会は本年度3回開催し、第8回(2021年11月2日)では、①本部運営委員会の報告、②仙台地方裁判所との情報交換会の企画、③次年度の支部総会時の講演会の企画、について、第9回(2022年2月10日)では、①仙台地方裁判所との情報交換の実施方針、②次年度の支部総会時の講演会の実施方針、③新任運営委員の紹介、第10回(2022年3月30日)では、①仙台地方裁判所との情報交

換会の開催報告、③次年度の支部総会時の講演会の具体的な進め方、について議論しました。

2022年5月14日には、リモート形式で、「日本建築学会司法支援建築会議東北支部 第2回講演会」を開催し、「近年の建築紛争の実情等について」と題して、仙台地方裁判所判事、第2民事部齊藤充洋裁判長より講演をお願いしております。大勢の参加を期待しております。

第42回東北建築賞(作品賞)選考報告

選考委員長 増田 聡

1. 応募作品

・小規模建築物部門	16 作品
・一般建築物部門	24 作品
計	40 作品

2. 選考経過

(1) 事前打ち合わせ会議 2021年9月16日(木)
10:30~11:30

於 日本建築学会東北支部会議室
選考委員長の選出、東北建築賞作品賞募集要項、選考委員会規則などを確認した上で、応募作品の数とその内訳を確認した。東北建築作品発表会の運営方法及び東北建築賞作品賞の選考基準などについて事前打ち合わせを行った。

(2) 東北建築作品発表会 2021年10月9日(土)
9:30~16:30

於 オンライン (Zoom)

第31回東北建築作品発表会において応募された作品の発表が行われた。初めてのオンライン開催ということで行き届かなかったところもあったが、限られた発表時間の中でそれぞれのコンセプトが紹介され、発表会は全体として滞りなく進められ終了した。時間厳守にご協力いただいた発表者、諸氏に敬意を表したい。

(3) 第1次審査会 2021年10月9日(土)
17:00~18:00

於 オンライン (Zoom)

東北建築作品発表会終了後、現地審査を行う必要のある作品を選定することを目的として、第1次審査を行った。小規模建築物部門と一般建築物部門を別々に選考せず、まとめて投票することになった。全作品の中から一人10票以内で投票することとなり、各委員の投票および発表内容を総合的に考慮した結果、小規模建築物部門5作品、一般建築物部門10作品、合計15作品を第1次審査通過とした。

次に、現地審査は1作品につき2名以上の選考委員がこれに当たることを確認し、選定された15作品について現地審査の分担を決め、現地において確認すべき点を検討し、施設管理者との連絡を含めた現地審査の日程調整は事務局

を通して行うこととした。

なお、1次審査の落選者へは200字程度の講評を選考委員分担で作成し、選考委員会として送付することを確認した。

(4) 現地審査

現地審査については11月と12月に選考委員で分担して実施した。

(5) 第2次審査 2022年1月8日(土)
13:00~17:00

於 日本建築学会東北支部会議室

まず、増田委員長より全体の進め方と評価ポイントの確認があった。その後、1作品ずつ現地審査担当委員からパワーポイント等を活用して報告がなされた後、ほかに現地を確認した担当委員からも印象や評価すべき点を報告した。報告を受けて、それぞれの作品ごとに、審査の評価ポイント等についての討議を選考委員全員で行った。すべての作品の紹介と討議が終わった後に、出席の全委員による投票を行った。投票に当たっては、昨年度は東北建築賞の募集がなかったこと、今年度は対象期間を延長して募集しており、応募数が40と例年よりも多くあったこと、などを踏まえて投票数を決定した。また、特別賞は特筆すべき点がある作品と、佳作として評価できる作品を対象とすることを確認した。

投票の結果、作品賞は一般建築物部門から5作品、小規模建築物部門から3作品の、合計8作品が選定された。特別賞については、一般建築物部門、小規模部門から各1作品が選定された。

(6) 総評

今回の受賞作品の多くが民間建築で、とりわけ住宅(戸建2件、集合1件)で個性的な作品が目につきました。また、地域コミュニティでの利用や開放を意識した作品もあり、個と共を考えさせられる豊かな取組だといえます。一方、公共建築では、震災復興後に移転新設で建てられた学校2件、庁舎1件も選出されました。今回の受賞作品に限らず、震災から10年以上が経過して被災各地に新たな地域行政・教育・福祉・観光などを担う施設が多数整備されました。その中で受賞作品のプラン・形態や構造に込められた「設計意図や優れた試み」が十二分に活かされていくことが期待され、コミュニティ再生や生活再建に果たす建築空間の役割を再確認する選考作業となりました。その他の受賞作品でも、立地環境を丁寧に読み取り、地域景観との相互作用やまちづくりへの貢献に配慮したものも多く、好感を持つことができました。

(7) 選考結果

「作品賞」8作品
小規模建築物部門

◆木町通の家

【施主】 宍戸 潤平 宍戸 佳

【設計監理】 SATO+ARCHITECTS

基本設計 佐藤充、真島嵩啓(元所員)

実施設計 佐藤充、真島嵩啓(元所員)

構造設計 図設計 高橋雷人

【施工】 共栄ハウジング 鈴木渉

◆噺館(はなしごや)

【施主】 峰田順一

【所在地】 山形県東村山郡山辺町山辺15

【設計監理】 本木大介建築設計事務所/本木大介

構造設計:株式会社丹羽設計事務所/丹羽邦弘

【施工】 建築:愛和建设株式会社

電気:株式会社東照電気

空調:山形環境システム株式会社

衛生:株式会社フカセ

外構:八松園株式会社、施主友人

◆あさひ会計 セミナー棟

【施主】 株式会社 旭ブレインズ

【所在地】 山形県山形市

【設計監理】 古谷誠章+NASCA

意匠:NASCA/古谷誠章、杉下浩平、

大森葉月

構造:木下洋介構造計画/木下洋介

機械設備:連設備コンサルタント/古瀬準一

電気設備:アーキシステムエンジ/渡邊貴則

サイン・ロゴ:甘利デザイン事務所/甘利弘樹

【施工】 建築:株式会社 市村工務店

機械:株式会社 ユアテック

電気:株式会社 ユアテック

家具:Celia

一般建築物部門

◆金蛇水神社外苑 SandoTerrace

【施主】 金蛇水神社

【所在地】 宮城県岩沼市三色吉字水神11-1

【設計監理】 建築:齋藤和哉建築設計事務所 担当/齋藤和哉 高橋雅人

構造:yAt 構造設計事務所 担当/中畠敦広

設備:E.I.S 設備計画 担当/高橋和弘 小野寺彰

照明:岡安泉照明設計事務所 担当/岡安泉

サイン:BLMU 担当/松井健太郎 桑原大輝

【施工】 建築:松井建設東北支店 担当/遊佐敏明 足立孝雄

機械:宮春工業 担当/三浦元

電気:北上電設工業 担当/大浦友己 阿部貴志

造園：岩沼造園土木 担当／大友宗一 大友晃

◆釜石市立唐丹小学校・釜石市立唐丹中学校・釜石市唐丹児童館

- 【施 主】釜石市
【所在地】岩手県釜石市唐丹町小白浜町 314
【設計監理】建築：有限会社乾久美子建築設計事務所
乾久美子
株式会社東京建設コンサルタント 前田格
構造：株式会社KAP 岡村 仁、石川敬一
設備：株式会社エンジニアリング 松石道典、
高山浩、川村光
植栽：株式会社プランタゴ 田瀬理夫
株式会社ヒュマス 高沖哉、露田亮祐
サイン：菊地敦己事務所 菊地敦己、玉村広
雅、佐藤謙行
照明：ぼんぼり光環境計画株式会社 角館ま
さひで、竹内俊雄
【施 工】前田・新光特定建設工事共同企業体
株式会社ユアテック

◆ロカド香久山

- 【施 主】トラスホーム株式会社
【所在地】福島県郡山市七ツ池町
【設計監理】株式会社ブルースタジオ
基本設計：株式会社ブルースタジオ／大島芳
彦、谷田恭平、立川慧
実施設計：陰山建設株式会社／
サイン・ロゴ：株式会社ブルースタジオ／大
島芳彦、大木錦之介
植栽計画：有限会社温室／塚田有一
【施 工】建築：陰山建設株式会社
電気設備：岡部電設株式会社
機械設備：有限会社カナメダ

◆陸前高田市立気仙小学校

- 【施 主】陸前高田市
【所在地】岩手県陸前高田市気仙町字愛宕下 1 番地 5
【設計監理】綾井新建築設計 綾井新
土屋辰之助アトリエ 土屋辰之助
教育環境研究所 長澤悟 野島直樹
構造：KAP 萩生田秀之
設備：環境エンジニアリング 南井克夫
ランドスケープ：小野寺康都市設計事務所
小野寺康
【施 工】佐武建設

◆弘前れんが倉庫美術館

ミュージアム棟

- 【施 主】弘前市
【所在地】青森県弘前市吉野町 2-1
【建築設計】Atelier Tsuyoshi Tane Architects
【設計統括】NTT ファシリティーズ、NTT ファシリティー
ズ東北
【構造設計】大林組、スターツ CAM
【設備設計】森村設計
【照明設計】岡安泉照明設計事務所
【運 営】エヌ・アンド・エー
【施 工】スターツ CAM、大林組、南建設共同企業体

カフェ・ショップ棟

- 【施 主】弘前賑わい創造
【所在地】青森県弘前市吉野町 2-11
【建築設計】Atelier Tsuyoshi Tane Architects
【設計統括】スターツ CAM
【構造設計】yasuhirokaneda STRUCTURE、スターツ CAM
【設備設計】スターツ CAM
【照明設計】岡安泉照明設計事務所
【施 工】西村組

「特別賞」2 作品
小規模建築物部門

◆副都心下の受光する住器

- 【施 主】鈴木勝昭
【所在地】宮城県仙台市
【設計監理】有限会社都市建築設計集団／UAPP 手島浩之
環境計画監修：東北大学大学院工学研究科
都市・建築学専攻 小林光
構造設計：皆本建築工房 皆本功
【施 工】株式会社気仙沼工務店

一般建築物部門

◆山元町役場

- 【施 主】山元町
【所在地】宮城県亶理郡山元町浅生原字作田山 32
【設計監理】建築：Cat/小嶋一浩、赤松佳珠子、大村真也
構造：オーク構造設計 / 新谷真人
空調・衛生：科学応用冷暖研究所 / 高間三郎
電気：EOS plus / 遠藤和広
建築・外構：SOY source architects / 安田直民
【施 工】建築・外構：加賀田組
空調・衛生：三建設備工業
電気：ユアテック

(8) 講評
作品賞

【木町通の家】

この住宅は、仙台市中心部にほど近い準防火地域の、軽自動車すら侵入できない狭隘道路に沿って8軒の住宅が密集する、武家屋敷跡の割譲敷地にあります。狭隘道路とはいうものの、そこは入口から住宅1軒分通り抜けると幅4mほどの袋小路であり、親密さが感じられます。この雰囲気敷地内に引き込む半屋外の「路地」は、地域と連続する庭や玄関である以上の役割を果たしています。すなわちリビングの続き間であり、在宅ワークの書斎であり、別の部屋にいる家族の気配を互いに感じる交差点であり、シアターであり、耐火外壁の一部であり、採光・換気の緩衝空間でもあります。特に、防火シャッターを「路地」の入口に設けたことで、法規上、「路地」に面する壁や開口部サッシは耐火性が不要になり、さらに隣家に向けた外周壁面に開口部をほとんど設けなかったことから、ローコスト化と高断熱化(UA値0.43W/m²K)を実現しています。このように、地域の特徴を生かした新たな都市型住宅の典型を示したことにより、東北建築賞作品賞に値すると評価されました。

【噺館(はなしごや)】

噺家を呼んで寄席を開き、みんなで落語を楽しむための小規模スペースです。しっかりとした高座が備えられた本格的な寄席の場が整えられており、客席は土間で落語を聞きに来た人たちは気兼ねなく寄席の場にアクセスすることができます。また、遠方から来る噺家をもてなし、寛いでもらうための宿泊スペースを完備しており、全面窓となっている東側からは蔵王連峰が一望できるなど、敷地が持つロケーションの魅力を最大限に引き出している計画となっています。寄席の場と野外との連結もスムーズで十分に整えられており、寄席だけではなく様々な小規模イベントに対応できそうな拡張性と開放性を感じます。本作品は一言で表現すれば、「噺家を呼んで寄席を開く小規模スペース」ということとなりますが、その一言には収まらない「楽しさ」と「遊び心」に満ちた空間です。仲間内で楽しむことを出発点に計画されたと思われる建物が、開放的な楽しさや遊び心でもって人々を惹きつけ、結果として良質な「地域のコミュニティ形成」を実現する、まさに代表的な例と言えるでしょう。このような空間を個人で管理していくことは大変な面も多いと感じますが、地域の中心的施設として末永くあり続けることを期待します。

【あさひ会計 セミナー棟】

山形市の玄関口にあたる、山形駅から山形県庁に向かう大通りに面した会計事務所のセミナー棟として建築されたものです。鉄骨造を主体としながら、印象的なファサードを構成するスギ無垢材による水平ルーバーは耐風などの構造要素としても活かされ、屋根架構には天井仕上げ材を兼ねるLVL材を用いるなど、ふんだんに木材を利用して柔らかい印象を与えている建物となっています。2階のセミナールームは、連続する切妻屋根とハイサイドライトを活か

した魅力的な大空間になっています。1階のオフィス・ラウンジも、考え抜かれた使い勝手とセキュリティ確保の要求の双方を、高い水準で実現しています。会計事務所という性格上、広く一般に開放するといった使い方には馴染みませんが、位置する大通りの中で外との繋がり拒絶することなく、既存の建屋とも融合して地域の景観に寄与することに成功しています。これらの点を踏まえて、東北建築賞に値すると評価されました。

【金蛇水神社外苑 Sando Terrace】

Sando Terraceは、岩沼市にある金蛇水神社の外苑に新築された木造建築で、JIA主催設計競技(2017年度)で最優秀賞を受賞し設計者が選出されました。建物は90度の円弧を描いた屋根付きの参道で、両脇に飲食店と地元特産品のショップ等が配置されています。参拝者は先が見通せないトンネルを通ることで、その先に見える本殿や広場がより明るく感じる効果が生じ、世と俗の切替装置として見事に機能しています。屋根形状は背後の山並みや本殿の屋並に調和するよう高さを抑えるため双頭の寄棟としています。また、ハード面のデザインの工夫だけでなく、蛇をモチーフにしたロゴや商品やメニューの開発、地元特産品のパッケージも地元デザイナーが手掛けるなど、ソフト面のデザインの充実がハードの質をより高めているところも評価のポイントといえます。そのため、参拝客・観光客が大幅に増え、ファミリー層など若い世代も多く訪れており、地域のランドマークとして岩沼のまちづくりに大きく貢献する施設となっています。

【釜石市立唐丹小学校・釜石市立唐丹中学校・釜石市唐丹児童館】

被災した小学校と児童館、半壊した中学校の全てを中学校敷地に再建した学校です。唐丹地区には小さな漁村集落が点在していますが、敷地は地区の中心的小白浜集落に位置しており海を見渡せる最上段の高台の傾斜地で、校舎は以前から存在していたかのように集落と一体となった風景を作り出しています。傾斜地に土木設計と建築設計の細やかなすり合わせを進めながら児童館、小学校、中学校と地域コミュニティ機能など5棟が丁寧に配置されています。5段の傾斜地の各高低差を利用した教室棟は室内空間が隅々まで明るく各教室の前庭と各棟間の屋外空間は有機的に連続され室内からの豊かな眺望、採光と通風の取り入れ口として有効に機能しています。庭や屋外通路は地域の高台避難経路として利用、地域のコミュニティの為の相談コーナーや備蓄倉庫、歴史資料館、集会室なども併設され防災拠点として集落の核となっています。内部空間構成と外部空間構成の細やかな計画と配慮に涙ぐましい努力が感じられます。東北建築作品賞として相応しいと評価されます。

【ロカド香久山】

ロカド香久山は、郡山市郊外の住宅地に建つ2階建14戸の民間賃貸住宅で、入居者同士のコミュニケーションを

意識した中庭を囲む口の字型の住棟配置が特徴です。また近隣とのつながりを意識して、角を開いたエントランス広場を設けており、その形状が「ロカド」の名の由来となっています。さらに全戸が中庭を介するアプローチをとるコモンアクセスが導入され、入居者同士の偶発的な顔合わせを促しています。集合住宅の計画においては、いわゆる南面並行配置が一般的で、日照・通風がネックとなる口の字型は、日本においては公的な集合住宅計画で実験的に行われたケースはありますが、民間でかつ地方都市ではかなりのレアケースと言えます。プライバシー偏重の現代にあっては、理念として受け入れられても、オーナーを説得して実現するのは至難の技です。一方、同住宅のオーナーは、企画設計者の大島芳彦氏のまちづくりの思想に共鳴し、近隣で所有する集合住宅のリノベーションも実施するなど、地域まちづくりにも設計者と協働で貢献しています。

【陸前高田市立気仙小学校】

震災により高台に統合移転されたこの小学校は、校舎の連なりが町並みをつくり、地域へと広がるコンセプトのもと、横断する地域の散歩道や分棟化させた木造の校舎群、広場のような中庭等配置計画において具現化されています。普通教室棟は2学年を1ユニットで構成、教室は8m角の空間に6m角の空間を内包した形態とし、教室と連続する凸型のオープンスペースは親密なスケールと開放感を両立させた小規模校ならではの空間となっています。大屋根の下で構成された特別教室棟は、多目的スペースが町のストリートとなり、特別教室が家のように配置され、八角形の本棚など様々な居場所がある図書室、発表会など目的に応じて多目的スペースと一体化する音楽教室など段階に地域開放できる工夫もされています。鉄骨リングと木の二重架構で無柱空間を実現した風の塔は、地域の伝統文化と構法を継承する高台のシンボリック的存在となっています。小規模校の今後のあり方として、東北建築賞に相応しいと評価されました。

【弘前れんが倉庫美術館】

明治・大正期に酒造工場として建てられ、戦後は日本で初めて大々的にシードルが製造されるなど100年にも及び、近代産業遺産として青森県弘前市の風景を形作ってきた吉野町煉瓦倉庫に対して、耐震も含めた改修を行い、市民の記憶や歴史を継承する美術館として再生させたプロジェクトです。「記憶の継承」のコンセプトに基づき、既存建物の煉瓦壁、木造及び鉄骨トラス屋根の部材を最大限に活用しつつ、必要な部材を加えて巧みな耐震補強を施すことで、建物の記憶を継承しながら、美術館という新たな施設となっています。建物の魅力を生かして国内外の先進的なアートを紹介するとともに、弘前そして東北地域の歴史、文化と向き合う同時代の作品の収集・展示することで、過去から現在、そして未来へと繋がる新たな創造性を喚起する文化創造の拠点となっています。スタジオや市民ギャラリーも設けており、市民の交流の場としても活用されてい

ます。

特別賞

【副都心下の受光する住器】

この住宅は、仙台市副都心部として再開発と人口増加が著しい住宅地の「旗竿敷地」にあります。現時点では同規模の住宅や畑に囲まれています。容積率200%の第3種高度地区であり、将来は採光・プライバシーの心配があったことから、壁面の開口部は最低限に抑え、独創的な断面を有したトップライトを設けています。まず、トップライト直下には熱線吸収塗料を施した曲面ミラーがあり、「熱を濾し取られた太陽光」のみが室内に降り注ぎます。そして有機的な形状の屋根裏天井は、光を乱反射し、まるで伝統的な古民家のように天井のない居住空間全体に、広く行き渡らせます。一方、棟部に溜まった熱気は、夏は開閉式トップライトから自然排熱され、冬はダクトファンで床下に誘導して上下温度差を解消しています。現地視察において、室内から見上げた時にトップライト越しにいつまでも眺めていられる空の色合いが印象的でした。このように、太陽光利用に対する挑戦的な取り組みと、実測データによる効果検証が、東北建築賞特別賞に値すると評価されました。

【山元町役場】

震災後に整備された新しい道路が緩やかにカーブする先、切り通しの隅から顔を出す控え目な存在感が、この建築のコンセプトを象徴的に示しています。深い庇下空間が外周を囲う裏のない造形は、まちの未来をみんなで作っていき求心的な場としての庁舎に対する解答として明快であるだけでなく、空間の活用方法や自然条件への対応等を総合的に考慮して導かれたものとして、高い説得力を有しています。内部はワンルームの中に「スモール・コア」を離散的に配置して、開放性と分節性とを両立しています。物理的な距離や視線の制御（見える/見えない）に加え、明るさや静けさの分布を設定した屋内のレイアウトは、ワンルームの中に程良いグラデーションを生み出しており、秀逸です。住民スペースの有効性等に対する評価が議論となりましたが、建設過程で繰り返されたワークショップに注がれたエネルギーや、竣工後に内部の環境を測定して設計の妥当性を検証する姿勢も含めた総合性において、東北建築賞特別賞に相応しいと評価されました。

第42回東北建築賞作品賞選考委員会

選考委員長 ・増田 聡 東北大学大学院経済学研究科
地域計画研究室

- ・前田 匡樹 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻
- ・有川 智 東北工業大学建築学部建築学科
- ・石山 智 秋田県立大学システム科学技術学部建築環境システム学科
- ・新井 信幸 東北工業大学建築学部建築学科
- ・崎山 俊雄 東北学院大学工学部環境建設工学科
- ・菅原 正則 宮城教育大学教育学部
- ・馬渡 龍 八戸工業高等専門学校産業システム工学科

- ・大宮利一郎 榊楠山設計
- ・六本木久志 建築舎・アトリエR
- ・西脇 智哉 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻

第42回東北建築賞（研究奨励賞） 選考報告

選考委員長 佐藤 健

本年度（2021年度）の研究奨励賞への応募論文は、構造分野において的場 萌子氏（国立研究開発法人建築研究所）から提出された「液状化地盤において杭頭局所変形を生じる鋼管杭の終局メカニズムの把握」の1編であった。

本論文は、大型遠心力载荷実験装置および上部構造物・鋼管杭基礎—飽和地盤系の詳細モデルを用いた振動台実験を行い、液状化地盤において杭頭局所変形を生じる鋼管杭の終局挙動を再現した。局所軸歪応答の計測結果から杭頭局所変形の発生メカニズムを明らかにするとともに、既往の研究で提案された液状化地盤における鋼管杭の終局耐力評価法の妥当性を検証している。

このような液状化地盤における鋼管杭の局所変形の進展状況から杭全体の終局メカニズムについて詳細に検討した研究例は極めて貴重であり、本論文の内容は今後の鋼管杭基礎の二次設計手法の発展に関する研究開発の進捗に大きく寄与するものと期待される。

審査の過程では、研究課題そのものに関する社会的意義の大きさや、実験装置に関するオリジナリティ等についての確認や議論があったものの、本委員会では業績説明書で示された他の論文も合わせて考慮するならば、論文の水準は高く今後の発展性も期待できることから、研究奨励賞に値すると最終的に判断した。

以上より的場氏の研究について、出席委員の評価と他委員による事前報告書の内容とを併せて集計した結果は、出席委員12名の委員がすべて合格（うち1名は推薦者、うち2名は委員長に一任）と判断し、本論文が研究奨励賞に相応しい業績であることを承認した。

第42回東北建築賞（研究奨励賞）選考委員会

委員長：佐藤 健

委員：木村祥裕、石山 智、西脇智哉（常議員と兼務）、寺本尚史、恒松良純、村上早紀子、山岸吉弘、野村俊一、一條佑介、大石洋之、濱 定史

第31回東北建築作品発表会報告

社会文化担当常議員 西脇 智哉

2021年10月9日（土）に、オンライン（Zoom）にて第31回東北建築作品発表会が開催された。本発表会は、東北建築賞作品賞応募者に作品についてプレゼンテーションをして頂くものであり、作品賞の1次審査を兼ねると共に、学会と地域社会との交流の推進、建築関係者の研鑽、ならびに東北地方の地域特性に立脚した建築作品の探求を目的としている。本年度は小規模建築物部門16作品、一般建築部門24作品の計40作品であった。発表会においては、まず石田壽一支部長より挨拶があり、その後、増田 聡選考委員長により発表にあたっての注意事項が説明された。その後の発表では、1作品につき質疑応答含7分の短い持ち時間であったものの、設計者から作品のコンセプトやアピールポイントについて充実したプレゼンテーションが行われた。質疑応答も1分という短い時間ではあったものの、活発な議論がなされ、活気のある発表会となった。

参加者は151名で盛会であった。今回はオンライン開催となったが、事前の準備と参加者の協力によって滞りなく実施することができたと考えている。次年度以降の開催形式がどのような形になるかは不透明であるが、今回の経験は一つの貴重なオプションになるものと期待される。今後も開催方式に関わらず、さらに関係団体、大学などを通じた積極的な案内を行い、より活気のある発表の場にするよう努めていきたい。

また、第31回東北建築作品発表会で発表される40作品と前回受賞した第40回東北建築賞作品賞が掲載されている東北建築作品集2021を刊行した。いずれも、近年の東北地方における建築活動の一端を示す貴重な建築作品であり、東北地方の建築にとっての共通課題の探求につながるものである。

作品選集「2021-2022」東北支部選考 経過報告

東北支部選考部会長 手島 浩之

「作品選集 2021-2022」の掲載選考にあたり東北支部には、24作品の応募があり、1作品が失格となり23作品が選考対象となった。支部書類審査を経て14作品が現地審査の対象となった。去年に引き続き、今年も東日本大震災からの復興に関連する施設が多かった半面、子ども関連の施設（保育所、幼稚園、こども園、小中学校関連施設）が多く現地審査の対象となったことも今年度の特長だと思える。現地審査を踏まえた支部審査会では7作品（Aランク3作品、Bランク3作品、Sランク1作品）を本部に推薦することにした。本部の審査会はリモートで行われ、事前の個々の審査による投票結果をベースに、6作品が掲載されることになった。

今年は、コロナ感染拡大予防を念頭に、現地審査員を2名に限定したこともあり、現地審査を踏まえた支部審査会

では、現地を確認した審査員とそうでない審査員の意見が合致せず、互いに納得し切れないまま結論に至らざるを得ない場面もあり、今後の審査への課題を残した。

2021年度日本建築学会設計競技

東北支部審査経過報告

課題「まちづくりの核として福祉を考える」

審査委員長 手島 浩之

今年の設計競技のテーマ「まちづくりの核として福祉を考える」である。福祉を巡る社会状況は、介護保険制度を前提とした現行制度から、地域包括ケアへと大きくシフトしようとする模索している。軽度の介護福祉は地域の人間関係の中で成立させ、それを広域の医療体制に接続されようという仕組みづくりである。このことはつまり、お金を介在させ制度(介護保険制度)として成立させた介護や見守り、といった福祉を、地域に返してゆき、少し前の日本には当たり前前にあった風景を取り戻そうということに他ならないのではないかと。東日本大震災からの復興でもそのことが大きな焦点になっていた。

応募数は14作品であり、それぞれについて事前に各委員が投票し、審査会に臨み、次の応募作品を支部入選とすることとした。

No.2「へっこみ〇〇〇のバスまち開き」は、路線バスのバス停に着目した作品である。まちに散在する小さな拠点を少しでも豊かにすることで、実際的に町への波及効果が予想されることから評価があった。No.3「馬を育て馬がなぐ人と街」は、昨年の卒業設計に似た傾向の作品があったことが指摘されたが、内容についての評価が高かった。No.4「廃校×多文化共生」は、建築空間的工夫の物足りなさを指摘する意見もあったが、その分、実際に即した実現可能性の高さを押さえているとも考えられ評価が為された。No.8「街と福祉を繋ぐ塀」は、境界に着目した視点の評価が高かったが、少年院を題材としており、その点について実現した際の課題も指摘された。No.13「未然福祉」は、福祉を巡る社会状況について、正確に課題を捉えており、満票を得た。

全体として、レベルが高く、福祉を巡る社会情勢への認識の高まりを肌で感じる審査会であった。一方で海外に目を向けるとウッドショック等にもみられるように、急激な経済成長や需要増から派生する現象もあり、世界一様でない複雑さをどう捉えるのかも大きな課題として見えてきている。

2021年度第84回支部研究報告会

常議員 曹 森

2021年度東北支部研究報告会「みちのくの風2021山形」は、2021年6月19日(土)にオンライン(Zoom)を会場に開催された。発表総数は、計画系35題、構造系21題の合計56題であった。当日は4会場に分かれ、環境・計画+歴史意匠・構造・材料施工の分野ごとに活発な意見交換が行われた。また同日には、建築デザイン発表会および特別企画「災害連絡調査会×福島県沖地震」が開催された。

本報告会は、新型コロナウイルス感染症の流行以来、初めてのオンライン開催だったが、参加された方々をはじめ、準備運営に関わった関係各位のご支援のお陰で無事終了することができた。

なお、2020年度より論文掲載料を値下げして会員に奮って申し込みしていただくようにしているが、コロナ禍も影響したのか2021年度の発表総数は前年度(2020年度:84題)より減少した。

2021年度第7回日本建築学会東北支部 建築デザイン発表賞 選考報告

選考委員長 櫻井 一弥

1. 応募講演

6 講演

2. 選考経過

2-1 建築デザイン発表会

2021年6月29日(土)11:00~12:06

於: Zoom によるオンライン発表

今回は、昨年に引き続き新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、みちのくの風2021がオンライン開催となったことに伴い、建築デザイン発表会もZoomを用いたオンライン開催となった。

応募6講演について、Zoomの画面共有機能を用いた発表が行われた。限られた発表時間の中でそれぞれのコンセプトが紹介されるとともに、活発な質疑回答が行われた。発表会は滞りなく進められた。時間厳守にご協力いただいた発表者各位、聴講者各位に感謝申し上げます。

2-2 選考委員会

2021年6月29日(土)12:10~12:40

於: Zoom によるオンライン発表

発表全体を聴講した建築デザイン教育部会の部会員9名(下記参照)で、建築デザイン発表賞にふさわしい講演を選出することとした。

内規に従い、計6件の講演より1つの講演を選出することを確認し、部会員相互で協議した。様々なタイプのプロジェクトがある中で、どのように賞を選出するか、議論が

難しかったが、最終的にはそれぞれのプロジェクトを多角的な視点から評価し、議論を通して決定することとした。その際、内規に記載の通り、建築デザイン発表会を欠席する部会員には事前に講演梗概を開示し、賞にふさわしい候補を挙げてもらうこととしていたが、欠席の部会員からは特に候補が挙がらなかったため、選考委員会に出席の部会員の意見で決定した。

結果、次節に示す講演に第7回建築デザイン発表賞を授与することとした。

選考委員長： 櫻井 一弥（建築デザイン教育部会長、東北学院大学）

選考委員： 小地沢将之（建築デザイン教育部会幹事、宮城大学）

浦部 智義（日本大学）

須田 眞史（宮城学院女子大学）

増田 豊文（東北文化学園大学）

大沼 正寛（東北工業大学）

西澤 高男（東北芸術工科大学）

馬渡 龍（八戸工業高等専門学校）

濱 定史（山形大学）

3. 選考結果

第7回日本建築学会東北支部建築デザイン発表賞 1点

「鮭川村 空き家活用定住促進住宅～地域と大学との連携によるリノベーションプロジェクト～」(E-4)

西澤 高男（東北芸術工科大学）

4. 講評

山形県鮭川村が、山形県建築住宅課、山形県住宅供給公社、東北芸術工科大学と協働で、村内の空き家を定住促進住宅にリノベーションしたプロジェクトである。

調査・絞り込みの上で村が買い上げた村内の空き家に対して、定住促進住宅にリノベーションするための2つの改修案を作成し、鮭川村空き家等対策協議会の方々にコンペ形式で実施案を選定してもらっている。併せて移住希望者等からの要望をヒアリングして改修設計に活かしている。最終的に1階に広い土間を置く開放的なプランを具現化した。

また、一部の断熱工事を学生たちや地域住民によるDIYワークショップで施工するなど、地域を巻き込んだアクティビティが展開されている。

選考委員会では、本講演は審査員全員から高く評価された。市街地ではない場所における空き家対策という現代的な課題に対して、地道な事業展開を図り、実際にリノベーションして新たな借り手が見つかるまでをうまく導いている。できあがった空間の秀逸さもさることながら、一連の事業としてのプロセス・デザインは模範的であり、今後各地で参照できるモデルとなる可能性を秘めている。そうした部分が総合的に評価され、今回の賞に選出された。

2021年度日本建築学会東北支部総会報告

前常議員 島山 雄豪

日時：2021年5月15日（土） 15:00～15:30

場所：オンライン（Zoom）

出席者：69名（委任状含む）

資料：

日本建築学会東北支部年報第41号

2021年度日本建築学会東北支部総会式次第

資料1-1：2020年3月31日現在 貸借対照表

資料1-2：2020年度 正味財産増減計算書（予算との比較）

資料1-3：2020年度 正味財産増減計算書内訳表

資料1-4：2020年度 同上（事業毎の決算比較）

資料2：2020年度 会計監査報告書

資料3-1：2020年度 正味財産増減予算書

資料3-2：2021年度 正味財産増減予算書内訳表

資料3-3：2021年度 正味財産増減予算書（事業毎の予算 昨年度と比較）

資料4：東北支部規程改正(案)

原田栄二常議員による開会宣言の後、同常議員の司会により、以下の要領で総会が行われた。

1. 出席者数及び委任状の確認

出席者24名、委任状45通、合計69名の確認があり、東北支部会員（3月理事会報告人数）1,074名の1/30（35名）以上に当たるため、本総会が成立することが確認された。

2. 支部長挨拶

石田壽一支部長による挨拶があり、昨年度コロナ禍の影響によりみちのくの風2020、全国大会が中止されたこと、東北支部の現状などが報告された。加えて、今年度のみちのくの風2021(オンライン)は開催されることが報告された。

3. 議事録署名員の選出

出席者の中から議事録署名員として、菅野秀人氏及び西脇智哉氏が選出された。なお、事業報告・決算報告は5月の本部通常総会での報告事項となっており、支部総会では報告のみとし議長は設けないこととした。

4. 議事

東北支部規程により、以下（1）（2）の事項について報告、（3）の事項について審議された。

（1）2020年度事業及び会計に関する件

1) 2020年度事業

相模誓雄常議員より、支部年報17～18ページの「2020

年度事業報告」に基づき、2020年度事業内容が報告された。

2) 2020年度収支決算

田村俊哉常議員より、資料 1-1「貸借対照表」、資料 1-2「正味財産増減計算書(予算との比較)」、資料 1-3「正味財産増減計算書内訳表」、資料 1-4「正味財産増減計算書(事業毎の決算比較)」に基づき、2020年度収支決算が報告された。

3) 会計監査結果

崎山俊雄支部監事より、資料 2「会計監査報告書」の通り、2020年度の会計内容については疑義のない旨の会計監査結果が報告された。

(2) 2021年度事業及び会計に関する件

1) 2021年度事業計画(案)

宮崎渉常議員より、支部年報 19～20 ページの「2021年度事業計画(案)」に基づき、2021年度事業計画案が説明された。

2) 2021年度収支予算(案)

高橋良子常議員より、資料 3-1「正味財産増減予算書」、資料 3-2「正味財産増減予算書内訳表」、資料 3-3「正味財産増減予算書(事業毎の予算 昨年度と比較)」が説明された。

上記(1)(2)の報告内容について、特別な問題指摘などは無かった。

(3) 支部規程の改正に関する件

石田壽一支部長より、資料 4「東北支部規程改正(案)」の通り、改定案が示された((第 12 条)議決事項の削除)。審議の結果、了承された。なお、改正予定日は 6 月理事会開催日とした。

以上の議事終了の後、司会者により閉会が宣言され、2021年度日本建築学会東北支部総会を終了した。

研究部会活動報告

(1) 建築史・意匠部会

部会長 飛ヶ谷 潤一郎

今年度もコロナ禍で、対面を中心とする諸々の部会活動は大きく制限された。むろん、部会員の会合などはオンラインで行われたが、オンラインのメリットを活かして、2月18日に「建築の作者：建築をつくるのはどんな人か」と題するシンポジウムを行った。このイベントは、前部会長の速水清孝氏(日本大学教授)が日本建築学会賞を受賞されたことが企画の発端となっており、「建築家」という昔から取り上げられてきた研究テーマを、歴史的かつ現代的に幅広く解釈することで、狭い研究分野にとらわれること

なく活発に議論されることを期待して試みたものである。登壇者は6名で、そのうち2名のパネリストは関東支部からお招きした。参加者は40～50名程度で、質疑応答も積極的に行われ、実に有意義なイベントだったと思う。今後もテーマを少しずつ変えながら、継続していきたいと考えている。

また、9月8日の日本建築学会大会の研究協議会「戦後昭和の建築：その価値づけをめぐる」では、東北支部から4名の著者による連名で「東北地方における戦後建築の保存と活用に関する近年の取り組み」を寄稿した。戦後昭和の建築については、価値が定まっていなまま、災害や経済的な理由によって取り壊されてしまったものも少なくないが、このことは2019年に東北四県の戦後建築のリスト化作業を行ったときにも強く実感した。なおこの寄稿論文は、前記の研究協議会の続編として3月2日に行われた関東支部のシンポジウム「戦後昭和の建築の地域性」においても若干手を加えた形で発表され、シンポジウム終了後もブレイクアウトルームで東北地方における別の保存活用の事例が話題となった。今後もこのような形で各支部との交流がさかんに行われることを期待したい。

(2) 建築計画部会

部会長 坂口 大洋

建築学会東北支部建築計画部会のメンバーの年度内活動の一つとして、2022年3月16日に発生した福島沖を震源とする地震の被害調査を行いました。全体的な被害としては、屋根・外壁の部材の損傷、崩落、公共施設や商業施設の大規模空間の二次部材の損傷及び天井崩落などが報告されています。宮城県内においても白石市文化体育活動センターの天井崩落など甚大な被害のケースもあります。実施調査としては、令和4年3月30日に仙台市体育館に被害調査を仙台市及び仙台市スポーツ振興事業団の協力を得て施工部会との共同調査として実施しました。被害状況としては、ブレースの損傷、吊り天井の損傷・崩落、ガラスの損傷などが確認されました。天井裏の調査ではスプリンクラー用配管の損傷、溶接の破断、ブレースの変形なども多くみられ、被害の甚大さと復旧への課題が確認できました。調査時点では施設再開の見込みが立っておらず建物被害とともに、地域の公共サービス上の課題も多く存在しています。

(3) 地方計画部会

部会長 小地沢 将之

地方計画部会は、昨年度に引き続き「小地域のエリアマネジメント」をテーマに、教育研究や実務のさまざまなフィールドで活躍する部会員の関心領域の擦り合わせを行っ

た。

昨年2月13日に発生した福島県沖地震に際しては、生活関連の被害のとりまとめを当部会として引き受け、災害調査速報としてとりまとめた。また、みちのくの風の特別企画として催されたオンラインシンポジウムでもその調査結果を報告し、討議を行った。この地震では、コロナ禍における避難所のあり方について注目が集まった。全国的にも注目を浴びた相馬市の避難所の視察を通じて、迅速な対応に至った背景を明らかにしたので、ぜひご一読いただきたい。

本年3月6日には、部会主催のオンラインシンポジウム「地方都市におけるエリアマネジメントの可能性」を開催した。足立千佳子氏(NPO法人とめタウンネット)からは、登米市における民間主導のエリアマネジメントの事例について報告していただいた。小地沢は、地域コミュニティがプロジェクト型のまちづくりを推進できる体制に変容しつつあることを紹介し、住民側に裁量のあるエリアマネジメントの可能性について討議した。全国から20名余りの聴講があり、活発な討議が行われた。

さて、相馬市の避難所開設がうまく機能したのは、行政主導の産物である。一方で、これからのまちづくりのあり方を展望すると、住民側に大きな裁量があり、責任をもって事業展開できるようなあり方が期待されている。どこまでが行政の役割で、どこまでが住民の役割であるべきか。これはまさに、「公共」とは何か、という問いそのものである。残念なことに、世界情勢も東北地方の公共事業も、こういった視点が欠如しているように感じた1年であった。

(4) 構造部会

部会長 前田 匡樹

2021年度は、年度当初からの新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う緊急事態宣言などの社会情勢により、大幅に活動が制限された。例年、開催していたJSCA東北支部との共催の講演会も開催が見送られた。

部会単独での活動が制限される中で、東北大学で開催された特別講演会を構造部会にも公開し、オンライン形式で聴講していただくことで、情報交換や研鑽の機会を設けた。

2021年7月5日には、三菱地所・CLT WOOD PROMOTION ユニット統・海老澤渉氏(三菱地所設計R&D 推進部 木質建築推進室、MEC Industry 企画営業部、兼務)を講師として、講演『構造デザインが切り拓くこれからの木造の可能性と未来』を開催した。2022年1月19日には、金箱構造設計事務所代表・金箱温春氏を講師として、講演『構造 デザインの発想』を開催した。

2022年3月16日に発生した福島県沖の地震では、福島県を中心に建築物にも被害が発生した。東北支部では、この地震災害に対して、日本建築学会本部の災害調査方針に従い、支部としての調査団を組織はせず、会員の判断で各自調査を行い、結果を集約して災害調査速報を発行するこ

ととした。構造部会では、その方針に基づき部会委員及びJSCA東北支部に呼び掛けて、被害調査の情報を収集した。2022年度は、新型コロナウイルス感染症の状況を慎重に見極めながら、活動を行っていく予定である。

(5) 環境工学部会

部会長 長谷川 兼一

環境工学部会では「東北地方の建築・都市の統合的な環境負荷削減のあり方に関する研究」という研究テーマを設定しているが、部会の活動は、昨今のカーボンニュートラル実現という社会ニーズへの貢献にも関与するものである。昨年度に引き続き、遠隔会議システムを活用して定常的な部会を3回開催(10月、12月、3月)した。部会員は東北各地を拠点としているが、会議参加のために移動する必要がなくなったため、在仙以外の部会委員が出席しやすくなっていることは喜ばしいことである。また、遠隔会議であっても情報共有や議論できるメリットを活かして新しい活動のあり方を探っていくことは意義がある。今年度は、部会開催に併せて、赤林伸一先生(新潟大学名誉教授)に最新の研究課題について話題提供いただき、議論を深めた。

当部会では、毎年度、親と子の都市と建築講座を提案し、今期は7月31日に秋田(『リモート「スマハキット」でスマートハウスの実力を体感しよう』)、1月23日に仙台(自分だけのへやづくりを仮想空間でかなえませんか?—イマジナリー・アーキテクチャーII—)を拠点として実施した。いずれもZoomを用いてのオンライン開催とし、部会で模索している新しい活動の試みである。特に、秋田を拠点としたイベントでは、仙台市、秋田市、由利本荘市に滞在する部会員が秋田県内の子供たちとオンラインで繋がり、遠隔操作で実験用模型をコントロールするというものである。このような形式での実施には課題もあるが、今後の可能性を拡げることができている点では成果を得ている。

また、「情報化と環境」を部会共有のテーマとしており、特にBIM関連技術に着目して継続的に話題に挙げている。コロナ禍に陥る前に、BIMの初学者を対象としてハンズオン・セミナーを準備してきたが、残念ながら実現には至っておらず延期を余儀なくされている。来年度は、BIM関連技術の最新情報も整理していきたいと考えている。

(6) 材料部会

部会長 石山 智

2021年度の材料部会では、前年度活動において見えてきた教育分野におけるオンライン技術の可能性について検討するため、「建築材料教育における遠隔授業とその効果」をテーマとして幹事会を2回、部会として施工部会と合同でオンライン見学会を1回開催し、活動を行った。また、当年度は「建築材料分野における研究教育活動のオンライン

化とその実践に関する調査研究」として支部研究補助の助成を受け、オンライン化による教育効果と新たな教育方法について研究を行った。

新型コロナウイルスの脅威と様々な影響の中で、当年度も部会活動には少なくない制限が課された状況であったが、開催した2回の幹事会では昨年度までに行われた情報共有や意見交換などの結果と、今年度行われた各大学における教育の状況などをもとに建築材料学教育のオンライン化とその利点およびその教育効果について検討した。その中で、東北大学で実践されているオンライン現場見学会が、学生側にも提供する現場側にも好評であることが情報共有されたことから、施工部会の協力を得て5月26日(木)にオンライン現場見学会を部会活動の一部として実施した。この見学会では、オンライン見学会に必要となる具体的な設備や環境などが示されると共に、その効果と利点、問題点などが確認され、非常に有意義な見学会となった。支部補助研究としてこれを実践例として、これまで情報共有を行ってきた建築材料学教育のオンライン実施例などをまとめ、報告した。

研究教育活動のオンライン化は、コロナ禍の状況にかかわらず機器類の開発や手法の向上により今後もさらに進化していくものと予想される。建築材料学教育の向上のためにも、新たな教育方法に関する情報収集を行っていきたいと考える。

(7) 施工部会

部会長 飯藤 將之

活動テーマは前年度と同じ「建築施工における技術継承と新たな展開」である。2019年度末からのCOVID-19感染防止のため、2020年度はすべてオンラインで開催し、2021年度も基本的にはzoomを使つての活動となった。

5月には、佐藤工業の黒崎黒崎裕光所長、奥野委員のご尽力により、オンラインでの作業所見学会を実施した。奥野委員、西脇委員、東北大学の学生2名と飯藤が、モバイルルーターとカメラと收音マイクなどを持って大崎西地区熱回収設備工事現場に入り、各委員が勤務先から画面越しで見学をするスタイルとした。現場事務所からスタートして、A工区(焼却炉)、B工区(ピット)、C工区(サービスヤード)まわりについて地上外部から中継し、ピットでは躯体工事の状況も中継し、各委員より満足行くコメントをいただいた。本見学会は材料部会との共催で実施し、実施にあたっては、西脇研究室に全面支援していただいたことに謝意を表す。

10月には、竹中工務店生産本部プロジェクト部長の鳥澤進一氏を支部にお招きし、「デジタル人材の育成」と題して、講演をしていただいた。国土交通省のBIM推進会議のモデル事業として取り組んだRC造3階建てとS造2階建ての

建物で、基本設計のフェイズからBIMを導入した事例をもとに、着工前に施工図の8割がそろうといった効率化がある一方で、担当者が責任をもってモデリングをすることや協力会社の係わり方の重要性、そして、意匠・構造のモデルを統合して確認する所長の役割について、示唆に富んだ講演をしていただいた。最後に、デジタル時代にあっても、最良の「作品」を遺すという理念を貫く姿勢でBIMに携わっていることを披露された。

2月は、那須建設株式会社建築部長の遠藤善広氏に大規模木造である「白鷹まちづく複合施設」の施工記録に関して講演をしていただいた。木材調達のプロセス、木構造ならではの耐火の工夫や多雪地での合掌とアーチの組合せ、水平力を分担する格子耐震壁やCLT床の施工など、大規模木造施工の要所をお話しいただいた。

コロナの中で、実際に講師が支部に来られたのは10月だけで、部会員は勤務先からの参加となり、限られた活動とはなったが、技術報告会を開催し続けられたことは意義深く、尽力してくださった皆様にお礼申し上げます。

(8) 建築デザイン教育部会

部会長 櫻井 一弥

2021年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、6月の「みちのくの風」はオンラインでの開催となり、それに合わせて「第7回建築デザイン発表会」もオンラインでの開催となった。応募6講演について、Zoomの画面共有機能を用いた発表が行われた。また、もう一つの大きな事業として、2014年度よりJIA(日本建築家協会)東北支部との共催で実施している「建築学生テクニカルセミナー2021」を対面方式で開催し、実りある成果が得られた。

第7回建築デザイン発表会は、2021年6月19日(土)11:00~12:06に行われた。限られた発表時間の中でそれぞれのコンセプトが紹介されるとともに、活発な質疑回答が行われ、発表会は滞りなく進められた。その後、建築デザイン発表賞選考委員会を開催し、1題を第7回日本建築学会東北支部建築デザイン発表賞として選出した。賞の選考過程に関する詳細並びに講評については「2021年度 第7回日本建築学会東北支部建築デザイン発表賞 選考報告」を参照されたい。

建築学生テクニカルセミナー2021は、2021年12月2日(木)13:30~15:30に、せんだいメディアテーク1階オープンスクエアで行われ、学生約20名、建築関係者約10名の計約30名が参加した。コロナ禍ではあったが、宮城県内での新規感染者数が落ち着いた状況のため対面開催ができた。

上記2つの大きな事業に加えて、第25回JIA東北建築学生賞に対する本部会からの審査員派遣を行った。実施日時は2021年10月29日(金)12:30~18:00、実施場所は仙台市市民活動サポートセンターである。なお、出展者であ

る学生はオンラインでの参加であった。

2022年度も、引き続き新型コロナウイルス感染症の状況を慎重に見極めながら、活動を決定していく予定である。

(9) 災害調査連絡会

部会長 佐藤 健

災害調査連絡会では、地震などの自然災害が発生した際に、迅速な被害調査、及び、復興支援活動を実施するための組織と連絡体制の整備に継続して取り組んでいる。委員長（佐藤健）のもと、支部内の8研究部会（構造、材料、建築計画、地方計画、歴史意匠、施工、環境工学、建築デザイン教育）の各部会長及び部会推薦委員からなる連絡・調整幹事会を設置し、本部災害委員会・東北支部代表委員（東北工業大学・堀則男教授）と連携しながら、災害発生時の情報発信と共有、被害調査の調整などを行っている。

2021年度は、2021（令和3）年2月13日23時08分頃に発生した福島県沖の地震（M7.3）の発生により、建築物等にも被害が発生したことを受け、東北支部災害調査連絡会が中心となり支部内の8研究部会と連携して被害調査を実施した。調査結果については、「令和3年2月13日福島県沖の地震災害調査速報」としてとりまとめた。さらに、2021年6月19日（土）には、みちのくの風—山形2021特別企画のオンラインシンポジウム「災害調査連絡会×福島県沖の地震」を開催し、調査概要の報告と総合討論が行われた。コメンテーターとなった東北大学の源栄正人名誉教授から、「災害調査は被害調査ではなく、被害のあったものとなかったものの際を論じることの重要性、防災対策の基本は弱点の把握とその解消である」といった示唆を共有することができた。

なお、「令和3年2月13日の福島県沖の地震災害調査速報」は、日本建築学会「建築書店」において定価1,000円で通信販売されている。

(10) 津波に強い建築を活用した津波減災研究委員会

委員長 田中 礼治
副委員長 船木 尚己

2011年の東日本大震災の被害状況から見て、少なくとも次のことが言えると考えている。

- ① 亡くなった人が多すぎる。
- ② 流出した建物が多すぎる。

多すぎるのだから、減少させる必要があると考えるのは誤ってはいないと思う。即ち、津波減災対策を行う必要があると考えられる。

東日本大震災の時もそうであったが、これまで津波という災害は土木分野の方が処理するものとして扱われてきた

と思う。別に建築分野の方が関係して悪いということはないと思うが、津波に対する建物関係の方々の足並みが多少遅かったということが言えると思う。

一般の地震の被害も、1981年の基準法の改定により飛躍的に被害率が低下したということは、「建築もやればできる」ということを示していると考えている。即ち、「津波についても建築もやればできる」と思っている。これが建築を活用する大きな理由である。結論的には、「津波に強い建築」を活用することによって津波減災ができると考えている。

「津波」と「避難」、「逃げる」は古くからワンセットとして、また、日常生活の知恵として用いられてきた。しかし、近代建築が非常に強いことが東日本大震災で認められたことから、最近では海の近くに津波避難タワーなどが建設されるようになってきた。東日本大震災以前には見られなかったことである。これまで見られなかった津波に強い建築を自由に使いこなすことによって、「津波」と「避難」をセットで考える必要のない時代がもうすぐ来るのではないかと考えている。津波で亡くなる方がなくなる時代も近いのかもしれない。本研究委員会の成果を期待していただければ幸いである。

支所だより

青森支所

青森支所長 盛 勝昭

新型コロナウイルス感染拡大により青森支所では2021年も思うような活動ができないままとなりました。

日常の活動が制限される中で「幹事会」は昨年同様に書面決議となり、青森支所の「全員協議会」も2年続けて開催中止となり、一堂に顔を合わせる機会が無いままとなっています。支所に所属している会員の方々は研鑽され、それぞれの分野で活動されていますが、支所としての活動にかなげるのは今のところ難しい状況です。

次年度以降の活動として考えているものをいくつか挙げてみました。

第一：講演、講習会など10年ほど前からの下記活動事例を参考にして、新たな活動等を会員の皆様に提案してもらおう

例：2019年「キールの軍港の再開発状況」、2018年「木造建築物の県産材活用」、2017年「イタリア国際デザインコンペ受賞に至る経緯について」、2016年「青森平野の地形・地質と地震振動」「オスカー・ニー・マイヤーの建築」、2015年「弘前城天守曳家工事にまつわる秘話」「高校生の建築コンペへの取り組み紹介」、2014年「大規模建築物・木造耐火技術講習会」「弘前の風景と設計姿勢」、

2013年「建築見学ツアーと出会い」、2012年「集合住宅における床衝撃音問題と防止方法について」「マチへ開くこと～近作を通して～」ほか

第二：青森の神社の成り立ち等の研究そしてこれからの運営に役立つ提案発表

第三：青森の寺社の成り立ち等の研究そしてこれからの運営に役立つ提案発表

第四：コロナ禍の最中に拘わらず青森に建設された優れた建築物の紹介等

第五：街づくりの提案

1. 電柱の埋設、2.用途地域変更の検討

第六：リモートでの講演・事業等の実施

以上、思いつくままに書きましたが、今後、支所会員の皆様と検討を重ねながら活動を継続し地域に貢献してまいりたいと思います。



岩手支所

岩手支所長 小野寺 哲志

2021年度、岩手支所では、「盛岡市都市景観シンポジウム」と「東北建築賞受賞作品展示会」の開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大により中止となり、主だった事業は行うことができませんでした。

2022年度については、新型コロナウイルスの一日も早い終息を願いますと共に、地域で開催される建築関係の活動等に対しての後援や地域社会との交流を図る諸事業の実施に努めてまいります。

また、岩手県においては、省エネ性能を有する住宅の普及のための人材の育成や県産木材の利用促進のための木造建築の設計技術者育成に取り組んでおり、これらについても協力していきたいと考えています。

山形支所

山形支所長 相羽 康郎

内部リニューアルした遊学館（県立LIB）研修室で2月5日ワークショップを行った。過去3年間のワークショップとそれを纏めて提言した内容(資料1)、提言を踏まえた県・市とのヒアリング議事録(資料2)、県・市への資料要求(資料3)、県・市の返答を伝えた後、講師が意見を述べ、参加者6名全員で討議を行った。

秋田支所

秋田支所長 松本 真一

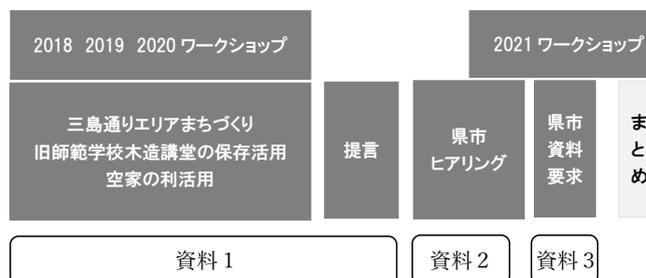
秋田支所が主催する一大行事「秋田県工業系高校生徒による建築設計作品コンクール」を本年も開催し、成功裡に終了しました。コロナ禍の中ゆえ、活動状態はやや寂しいですが、コンクールは配慮工夫を重ねて実施しました。

この「秋田県工業系高校生徒による建築設計作品コンクール」は、秋田支所主催、9団体後援による工業系高校生の建築教育への貢献を目的とする伝統行事です。今回は記念すべき50年目の催しとなり、「第50回記念特別賞」も設けました。コロナ禍ゆえの参加減少の懸念が現実となり、2校3グループが出品を断念する悲しい事態となりましたが、結果として10作品の出品（参加者24名）があり、主催者側が設定した最低限の目標は達成できました。

作品は、コンクールのために新規プロジェクトを立ち上げるといよりは、正課科目などで扱った課題をブラッシュアップしたものが大半でしたが、そのアップグレードの中身には先生方の厚い指導やグループでの議論や共同作業の跡がはっきりと認められ、全先品から若者らしい「伸びしろ」も十分に感じられましたし、特に今年は、国連SDGsに呼応するような、あるいは家族の意味・絆を再確認するようなコンセプトの作品が光りました。

厳正な審査の結果、最優秀賞には秋田県立由利工業高等学校の生徒3名による「with（ウィズ）」を選定し、令和4年2月11日に講評会と表彰式（写真）を実施しました。

支部や支所の運営に携わる皆様方から賜った、様々な活動支援に対して、ここに御礼を申し上げます。



(講師の意見)

山形県は旧師範学校木造講堂に対し教育庁と文化財活用課が互いに放任したまま時間経過する印象で、このままでは建物が朽ちる恐れもある。本来は加わるべき建築部署が充実していない。

建築指導課は新築、建築課は公共施設、空家・リニューアルはどこになるのか。市にまちづくり政策部はあるものの、まちづくりを大局的に手掛けていない。総じて建築が前面に出てくる体制がない。

空家はどこも同じ状況で相続からみの話が多い。リフォーム業者をいかに選別できるかが重要で、トラブルを防止するための情報発信が必要である。究極の対応として登録制の提案がある。

(参加者全員の討議結果)

建築の理解者が県・市に少ないならば、その仕事を委託する方法か。小さな町だとまちづくりの協会メンバーと進む道を作れる。建築士会ではヘリテージマネージャーでそれをしようとしている。保存や空家やリフォームなど建築の情報発信力を、行政だけでなく民間の団体が高める方策が求められる。

事例を知ることで、行政と民間が協力して活動し、調査予算などを活用できる方法も見通せる。

三島通り界限とか景観の計画が大切になる。大学などとも連携して、建築まちづくりに関わる集団が総合的に活動できる体制を整備できないか。

建築の情報発信力を高めるため、情報発信段階、プロジェクト制活動をする段階、行政との情報交換段階などに応じて、民間団体同士が連携して実行する必要がある。

福島支所

福島支所長 渡邊 佳文

2021年度の福島支所の活動状況について報告いたします。

今年度は、『親子の建築講座～親子で学ぼう やさしい建築構造力学講座～』の開催と『第14回福島県建築系高校卒業設計優秀作品表彰』への協賛を中心に活動しました。

『親子の建築講座～親子で学ぼう やさしい建築構造力学講座～』は、建築を楽しく知ってもらい、建築への興味を育むことを目的に、1月8日に福島市の「福島県教育会館」で開催し、県内の小学生親子等9名(4チーム)に参加いただきました。始めに、講師から建築構造の基礎について説明があり、住宅の軸組模型やイラストなどにより建築構造を身近に感じながら学ぶことができました。その後行ったワークショップでは、チームごとに1枚のボール紙で70cm離れた台に架ける「梁」を製作し、吊り下げられるおもりの重さを競いました。座屈しそうになっても増え続けるおもりに耐える梁に対し、会場から拍手が起こる

など大きな盛り上がりを見せました。



親子で学ぼう やさしい建築構造力学講座

協賛した『第14回福島県建築系高校卒業設計優秀作品表彰』では、県内の建築系学科を有する高校4校の12人を表彰し、高校生活で培った技術や創造性をたたえました。3月7、8日に福島市で開催された優秀作品展では、学生のような工夫やアイディアに溢れるすばらしい作品が並び、多くの県民が見学しました。

福島支所といたしましては、将来を担う子どもたちが誇りと愛着を実感できる新しい未来が形づくられるよう、引き続き、学術的な研究等を広く還元・発信するなど、地域の教育機関や関係団体と連携・協働しながら、地域に根ざした支所活動や事業を更に充実させ、福島の復興・創生に貢献していきたいと考えております。

支部役員会から

常議員(総務企画) 菅野 秀人

支部役員会は、支部長と14名の常議員で構成される。常議員は、会務を処理するため、支部役員会において会務を審議し、議決するものと定められており、東北支部全体の運営を担っている。支部役員会は、年2回以上支部長が招集することとされているが、基本的には隔月程度の頻度で開催されている。

本年度は、支部役員会が4月、5月、7月、9月、12月、2月、3月と開催され、粛々と会務の処理を行うことができた。支部役員会の開催に際しては、Zoomを利用し、新型コロナウイルス感染防止対策を徹底しながら、出席者の増加に効果を上げている。

毎年恒例の行事である、支部総会と支部研究報告会を核とした「みちのくの風」であるが、昨年度は新型コロナウイルス感染拡大につき中止をやむなくされた。今年はオンライン(Zoom)を利用して、従来の支部研究報告会と建築デザイン発表会を開催し、研究報告集第83号(構造系・計画系)とCD-ROMを発刊した。特別企画として東北探

訪エクスカーション・シンポジウムを開催し盛会に終了することができた。また、同じく昨年中止となった東北建築賞作品賞部門について、今年にはオンラインを用いて東北建築作品発表会を開催した。

また、9月には支部長・総務企画担当常議員も出席して支所長会議を実施し、みちのくの風、日本建築学会文化賞の推薦、次年度からの支所交付金の取り扱いについて報告・審議と意見交換を行った。2021年度の支部役員会で取り上げられた主な議事を以下に示す。

■4月総務会（2021年4月20日開催）

[報告事項]理事会報告、会計報告、決算報告、常議員選挙結果・役割分担、支部研・デザイン発表会論文募集の報告と懸案事項、建築年報への事業報告、支部年報編集報告 [審議事項]総会資料（司会進行・懇親会）、みちのくの風 2021 山形、新常議員の役割分担、事務局職員の給料、その他

■5月支部役員会（2021年5月15日開催）

[新旧役員の引継ぎ] [報告事項]年間行事予定と会議形式、会計報告、建築文化週間事業報告、 [審議事項]支部長代行者、みちのくの風 2021 山形、卒業設計展示会、福島県沖の地震速報（冊子）発刊進捗報告 [審議事項] 2021 年度災害委員会支部市民企画募集、建築文化週間事業、後援依頼、オンラインストレージの使用法、その他

■7月支部役員会（2021年7月28日開催）

[報告事項]理事会報告、会計報告、支部総会報告、みちのくの風 2021 山形開催報告、作品選集 2021-2022 選考進捗報告、本会設計競技支部審査報告、後援依頼承諾、災害委員会支部企画申請と採択報告、後援依頼承認報告、福島県沖の地震速報と販売、宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク記録集 [審議事項]本会文化賞推薦依頼、本会教育賞推薦依頼、本会大賞推薦依頼、支部規程の変更、第42回東北建築賞スケジュール、みちのくの風2022秋田、次期支部長選挙、その他

■9月支部役員会（2021年9月17日開催）

[報告事項]理事会報告、会計報告、作品選集 2021-2022 報告、第23期代議員および支部推薦理事候補者・支部役員選挙、東北建築賞（研究奨励賞部門と業績賞部門）応募報告、作品選集東北支部部会次期委員選出報告 [審議事項]みちのくの風2022秋田、2022年度支部総会の日程と会場、選挙管理委員会の設置、2022年度設計競技支部審査員、後援依頼、その他

■11月支部役員会（2021年11月30日開催）

[報告事項]理事会報告、会計報告、代議員・支部推薦理事候補者・常議員候補者届出報告、次期設計競技全国審査員・支部審査員選出報告、支部研・デザイン発表会申込受付フォームの進捗状況、第31回東北建築作品発表会報告、第42回東北建築賞研究奨励賞選考報告 [審議事項]2022年度支部総会日程・会場・担当・付随行事、みちのくの風 2022 秋田、2022年度支部予算案、支部研究報告集論文募集スケジュール・募集要項、建築デザイン発表会募集要項、支部年報発刊計画、支部研究補助費申請、全国大学高

専卒業設計展示会会場確認、男女共同参画事業、その他

■2月支部役員会（2022年2月21日開催）

[報告事項]理事会報告、会計報告、支部研究補助費申請報告、秋田支所からの賞状贈呈依頼承認報告、2022年度全国・大学高専卒業設計展示会の日程報告、支部年報 42号原稿執筆依頼、第42回東北建築賞作品賞選考報告 [審議事項]みちのくの風 2022 秋田、2022年度親と子の建築講座と建築文化事業、男女共同参画事業、後援依頼
その他

■3月支部役員会（2022年3月17日メール審議）

[報告事項]理事会支部長会議報告、会計報告、支部研・デザイン発表会論文提出報告、男女参画事業報告、支部年報編集進捗 [審議事項]支部総会、みちのくの風 2022 秋田、その他

2022年度 支部役員名簿

東北支部常議員の構成と役割分担

役割	2021年度 (2021年6月～2022年5月)	2022年度 (2022年6月～2023年5月)
支部長	石田 壽一 (東北大)	速水 清孝 (日大)
総務企画	宮崎 渉 (日大) 菅野 秀人 (秋田県立大) 佃 悠 (東北大) 谷本裕香子 (東北工大) 恒松 良純 (東北学院大)	佃 悠 (東北大) 谷本裕香子 (東北工大) 恒松 良純 (東北学院大) 市岡 綾子 (日大) 込山 敦司 (秋田県立大)
社会文化	手島 浩之 (都市建築設計集団) 西脇 智哉 (東北大) 坂口 大洋 (仙台高専)	坂口 大洋 (仙台高専) 大野 晋 (東北大) 安田 直民 (SOY source 建築設計事務所)
学術教育	一條 佑介 (東北文化学園大) 曹 森 (東北工大)	八十川 淳 (東北文化学園大) 佐々木留美子 (東北工大)
会計会員	鈴木 博之 (仙台市) 中嶋 典之 (JR 東日本)	鈴木 博之 (仙台市) 中嶋 典之 (JR 東日本)
図書情報	西尾 洗毅 (八戸工大) 高橋 岳志 (日大)	高橋 岳志 (日大) 安部 信行 (八戸工大)
事務局	伊藤 章子	伊藤 章子

研究部会長

研究部会	部会長
構造部会	前田 匡樹 (東北大学教授)
材料部会	石山 智 (秋田県立大学准教授)
建築計画部会	坂口 大洋 (仙台高等専門学校教授)
地方計画部会	小地沢将之 (宮城大学准教授)
建築史・意匠部会	飛ヶ谷潤一郎 (東北大学准教授)
施工部会	西脇 智哉 (東北大学准教授)
環境工学部会	長谷川兼一 (秋田県立大学教授)
建築ガザン教育部会	櫻井 一弥 (東北学院大学教授)
災害調査連絡会	佐藤 健 (東北大学教授)
津波に強い建築を活用した津波減災研究委員会 (任期付)	田中 礼治 (東北工業大学名誉教授)

東北支部会員数 (2022年4月1日現在)

名誉会員	2名
終身会員	68名
正会員 (個人)	1,119名
正会員 (法人)	35法人
準会員	41名
賛助会員	7法人

支部監事

2021年6月～2023年5月

高橋 良子 (仙台市)
畠山 雄豪 (東北工大)

東北支部選出代議員

任期	代議員
2021年4月 ～ 2023年3月	姥浦 道生 (東北大学教授) 森山 修治 (日本大学教授)
2022年4月 ～ 2024年3月	五十嵐太郎 (東北大学教授) 薛 松濤 (東北工業大学教授)

支所長

支所	支所長
青森支所	盛 勝昭 (株盛興業社 代表取締役)
秋田支所	松本 真一 (秋田県立大学建築環境システム学科教授)
岩手支所	小野寺哲志 (岩手県県土整備部建築住宅課総括課長)
山形支所	相羽 康郎 (特定非営利活動法人まちづくり山形理事長)
福島支所	渡邊 佳文 (福島県土木部建築住宅課長)

一般社団法人 日本建築学会東北支部	自 2021 年 4 月 1 日 至 2022 年 3 月 31 日
2021 年度事業報告	

〈事務の部〉

総 会	1. 2021 年度事業報告・決算報告・会計監査報告 2. 2022 年度事業計画・予算案 3. 支部規程の改正	2021 年 5 月 15 日 オンライン (Zoom)
諸 会 合	総会 (1)、支部役員会 (9)、支所長会議 (1)、東北建築賞作品賞選考委員会 (3)、東北建築賞研究奨励賞選考委員会 (1)、設計競技支部審査会 (1)、選挙管理委員会 (1)、作品選集支部選考部会 (2)、司法支援建築会議東北支部運営委員会 (2)、男女共同参画事業 (1)、その他部会など	() は回数
代議員半数改選	(留任) 松本真一、持田 灯 (新任) 姥浦道生、森山修治	2020 年 4 月～2022 年 3 月 2021 年 4 月～2023 年 3 月
支部長改選	(留任) 石田壽一	2020 年 6 月～2022 年 5 月
常議員半数改選	(退任) 相模誓雄、高橋良子、田村俊哉、畠山雄豪、濱 定史 原田栄二、山田義文 (留任) 一條佑介、菅野秀人、曹 森、手島浩之、西尾洗毅 西脇智哉、宮崎 涉 (新任) 坂口大洋、鈴木博之、高橋岳志、谷本裕香子、佃 悠 恒松良純、中嶋典之	2019 年 6 月～2021 年 5 月 2020 年 6 月～2022 年 5 月 2021 年 6 月～2023 年 5 月
支 部 監 事	高橋良子、畠山雄豪	2021 年 6 月～2022 年 5 月

〈支部事業〉

研究委員会	[部会名] [部会長] [研究テーマ] 構 造 : 前田匡樹 耐震補強技術における新しい試みに関する研究調査 材 料 : 石山 智 サステナビリティ確保に向けた建築材料からの取り組み 建築計画 : 坂口大洋 縮退社会における建築計画の課題抽出と実践化 地方計画 : 小地沢将之 小地域のエリアマネジメント 建築史・意匠 : 飛ヶ谷潤一郎 歴史的建築及び資料の保存・活用に関する研究 環境工学 : 長谷川兼一 東北地方の建築・都市の統合的な環境負荷削減のあり方に関する研究 施 工 : 飯藤将之 建築施工における技術継承と新たな展開 建築デザイン教育 : 櫻井一弥 東北地方の建築デザイン教育の質的向上に関する研究 災害調査連絡会 : 佐藤 健 東北地域における地震及び各種災害が発生した際の調査、広報に関わる連絡や調整および関連事業の企画立案と支援 津波に強い建築を活用した津波減災研究委員会 (期限付) : 田中礼治	
本部・支部研究助成金による研究	・ 建築材料分野における研究教育活動のオンライン化とその実践に関する調査研究 材料部会 (研究代表者 石山 智)	2021 年 4 月～2022 年 3 月
支部研究報告会	2021 年度第 84 回東北支部研究報告会 研究報告集第 84 号計画系・構造系刊行 発表題目 56 題	2021 年 6 月 19 日 オンライン (Zoom)
デザイン発表会	2021 年度第 7 回東北支部建築デザイン発表会 発表題目 6 題	2021 年 6 月 19 日 オンライン (Zoom)
支 部 主 催 支 部 共 催 イ ベ ン ト	1. 支部主催 1) 建築教育文化事業 建築文化週間事業 2) 第 42 回「東北建築賞」募集 3) 第 31 回「東北建築作品発表会」の開催 4) 第 42 回「東北建築賞」の選考 5) みちのくの風 2021 山形 ・ 第 84 回支部研究報告会 ・ 第 7 回建築デザイン発表会	2021 年 6 月～7 月 2021 年 10 月 9 日 オンライン (Zoom) 2021 年 10 月～2022 年 1 月 2021 年 6 月 19 日・20 日 オンライン (Zoom)

	<ul style="list-style-type: none"> ・特別企画 東北探訪エクスカーショントシンポジウム 震災復興10年とこれからの10年-近未来の東北と建築学専門家集団の関わり方 セッション①「災害調査連絡会×福島県沖の地震」 セッション②「文化財保存まちづくり × 山形県尾花沢市銀山温泉」 セッション③「地域包括ケア×宮城県石巻市」 セッション④「原子力災害復興×福島県楡葉町」 <p>2. 支部共催</p> <p>親と子の都市と建築講座、建築文化週間事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リモート「スマハキット」でスマートハウスの実力を体感しよう ・親子で学ぼう やさしい建築構造力学講座 ・自分だけのへやづくりを仮想空間でかなえませんか？ -イマジナリー・アーキテクチャーII- <p>3. 男女共同参画事業</p> <p>ジェンダー・バイアスと建築</p> <p>4. 司法支援建築会議東北支部第1回講演会</p> <p>東北地方の各地における建築紛争の現状と課題</p>	<p>2021年7月31日</p> <p>2022年1月8日</p> <p>2022年1月23日</p> <p>オンライン (Zoom)</p> <p>2022年3月9日</p> <p>オンライン (Zoom)</p> <p>2021年5月15日</p> <p>オンライン (Zoom)</p>
研究部会主催	<p>1. シンポジウム</p> <p>2. その他、部会ごとに講習会・研究会・見学会などを適宜開催</p>	
表彰	<p>1. 日本建築学会設計競技支部入選者3名紹介</p> <p>2. 日本建築学会功労者表彰 個人会員2名</p> <p>3. 日本建築学会終身正会員9名紹介</p>	<p>2021年5月15日</p> <p>オンライン (Zoom)</p>
支所活動	<p>青森支所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幹事会 <p>秋田支所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第50回秋田県工業系高校生による建築設計作品コンクール <p>岩手支所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第45回盛岡市都市景観シンポジウム後援など <p>山形支所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学協会ワークショップ4学協会と建築物の保全と実現方策づくり <p>福島支所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親と子の都市と建築講座「親子で学ぼう やさしい建築構造力学講座」 ・支所後援事業など 	<p>2021年7月</p> <p>2022年2月9日 (審査会)</p> <p>2022年2月11日 (表彰式)</p> <p>2021年11月</p> <p>2022年2月5日</p> <p>2022年1月8日</p>
刊行活動	<p>令和3年2月13日の福島県沖の地震災害調査速報</p> <p>支部年報第41号発刊</p> <p>東北支部研究報告集第84号計画系・構造系ならびに第7回建築デザ</p> <p>イン発表会梗概集 (CD-ROM) 発刊</p> <p>東北建築作品集 (第31号) 発行</p>	<p>2021年4月20日</p> <p>2021年5月15日</p> <p>2021年6月19日</p> <p>2021年10月9日</p>

〈支部共通事業〉

講習会	新型コロナウイルス感染拡大のためなし	
展示会	<ul style="list-style-type: none"> ・全国大学・高専卒業設計展示会巡回展示会 山形市、郡山市 	2021年9月～2021年11月
審査会	<ul style="list-style-type: none"> ・2021年度支部共通 日本建築学会設計競技 テーマ：「まちづくりの核として福祉を考える」 ・日本建築学会「作品選集2021-2022」東北支部選考部会 	<p>2021年7月7日</p> <p>オンライン</p> <p>2021年6月～8月</p> <p>オンライン (Zoom)</p>

一般社団法人 日本建築学会東北支部	自 2022 年 4 月 1 日 至 2023 年 3 月 31 日
2022 年度事業計画（案）	

〈事務の部〉

総 会	1. 2021 年度事業報告・決算報告・会計監査報告 2. 2022 年度事業計画・予算案	2022 年 5 月 14 日 オンライン (Zoom)
諸 会 合	総会 (1)、支部役員会 (9)、支所長会議 (1)、東北建築賞作品賞選考委員会 (3)、東北建築賞研究奨励賞選考委員会 (1)、東北建築賞業績賞選考委員会 (1)、設計競技支部審査会 (1)、選挙管理委員会 (1)、作品選集支部選考部会 (2)、研究部会連絡会 (1)、司法支援建築会議東北支部運営委員会 (3)、男女共同参画事業 (1)	() は回数
代議員半数改選	(留任) 姥浦道生、森山修治 (新任) 五十嵐太郎、薛 松濤	2021 年 4 月～2023 年 3 月 2022 年 4 月～2024 年 3 月
支部長改選	(退任) 石田壽一 (新任) 速水清孝	2020 年 6 月～2022 年 5 月 2022 年 6 月～2024 年 5 月
常議員半数改選	(退任) 一條佑介、菅野秀人、曹 森、手島浩之、西尾洗毅 西脇智哉、宮崎 渉 (留任) 坂口大洋、鈴木博之、高橋岳志、谷本裕香子、佃 悠 恒松良純、中嶋典之 (新任) 安部信行、市岡綾子、大野 晋、込山敦司、佐々木留美子 安田直民、八十川 淳	2020 年 6 月～2022 年 5 月 2021 年 6 月～2023 年 5 月 2022 年 6 月～2024 年 5 月
支 部 監 事	高橋良子、畠山雄豪	2022 年 6 月～2023 年 5 月

〈支部事業〉

研究委員会	[部会名] [部会長] [研究テーマ] 構 造 : 前田匡樹 耐震補強技術における新しい試みに関する研究調査 材 料 : 石山 智 サステナビリティ確保に向けた建築材料からの取り組み 建築計画 : 坂口大洋 縮退社会における建築計画の課題抽出と実践化 地方計画 : 小地沢将之 小地域のエリアマネジメント 建築史・意匠 : 飛ヶ谷潤一郎 歴史的建築及び資料の保存・活用に関する研究 環境工学 : 長谷川兼一 東北地方の建築・都市の統合的な環境負荷削減のあり方に関する研究 施 工 : 西脇智哉 建築施工における技術継承と新たな展開 建築デザイン教育 : 櫻井一弥 東北地方の建築デザイン教育の質的向上に関する研究 災害調査連絡会 : 佐藤 健 東北地域における地震及び各種災害が発生した際の調査、広報に関わる連絡や調整および関連事業の企画立案と支援 津波に強い建築を活用した津波減災研究委員会 (期限付) : 田中礼治	
支部研究補助費による研究	・ 建築環境・設備分野における BIM 関連技術の動向に関する調査研究 環境工学部会 (研究代表者 長谷川兼一)	2022 年 4 月～2023 年 3 月
支部研究報告会	2022 年度第 85 回東北支部研究報告会 研究報告集第 85 号計画系・構造系刊行 発表題目 73 題 2022 年度第 8 回東北支部建築デザイン発表会 発表題目 5 題	2022 年 6 月 19 日 オンライン (Zoom)
支 部 主 催 支 部 共 催 イ ベ ント	1. 支部主催 1) 建築文化週間事業 2) 第 32 回「東北建築作品発表会」の開催 3) 第 43 回「東北建築賞」の選考 4) みちのくの風 2022 秋田 ・ 第 85 回支部研究報告会 ・ 第 8 回建築デザイン発表会 ・ 令和 4 年 3 月 16 日の福島県沖の地震 災害調査報告会 ・ 田辺会長の基調講演会	2022 年 10 月 2022 年 10 月 8 日 2022 年 10 月～2023 年 1 月 2022 年 6 月 18 日・19 日 オンライン (Zoom)

	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン見学会 2. 支部共催 親と子の建築講座・建築文化週間事業 3. 男女共同参画事業 4. 司法支援建築会議東北支部第2回講演会 	<p>2022年7月～12月</p> <p>2022年4月～2023年3月 オンライン (Zoom)</p> <p>2022年5月14日 オンライン (Zoom)</p>
研究部会主催	<ul style="list-style-type: none"> 1. シンポジウム 2. その他、部会ごとに講習会・研究会・見学会などを適宜開催 	
表彰	<ul style="list-style-type: none"> 1. 新名誉会員1名と終身正会員3名紹介 2. 日本建築学会設計競技全国・支部入選者の紹介 	2022年5月14日 オンライン (Zoom)
支所活動	<ul style="list-style-type: none"> 青森支所 <ul style="list-style-type: none"> ・幹事会 秋田支所 <ul style="list-style-type: none"> ・第51回秋田県工業系高校生による建築設計作品コンクール 岩手支所 <ul style="list-style-type: none"> ・第46回盛岡市都市景観シンポジウム後援など 山形支所 <ul style="list-style-type: none"> ・学協会ワークショップ 福島支所 <ul style="list-style-type: none"> ・親と子の都市と建築講座：福島市 ・後援事業 	<p>2022年7月</p> <p>2023年2月</p> <p>2022年11月</p> <p>2022年11月・2023年2月</p> <p>2022年8月</p>
刊行活動	<ul style="list-style-type: none"> 支部年報第42号発刊 東北支部研究報告集第85号計画系・構造系（第8回東北支部建築デザイン発表会込）CD-ROM発刊 東北建築作品集（第32号）発行 	<p>2022年5月14日</p> <p>2022年6月19日</p> <p>2022年10月8日</p>

〈支部共通事業〉

講習会	「建築工事標準仕様書・同解説 JASS5 鉄筋コンクリート工事」 改定講習会	2022年11月
展示会	全国大学・高専卒業設計展示会 山形市、郡山市、八戸市で開催	2022年6月～11月
審査会	<ul style="list-style-type: none"> ・2022年度支部共通事業日本建築学会設計競技課題「『他者』とともに生きる建築」 ・日本建築学会「作品選集2023」東北支部選考部会 	<p>2022年7月 オンライン (Zoom)</p> <p>2022年6月～9月 支部事務所もしくは オンライン開催</p>

法人・賛助会員

(株)阿部重組	(株)本間利雄設計事務所+
阿部建設(株)	地域環境計画研究室
(株)関・空間設計	(株)東北開発コンサルタント
鹿島建設(株)	東日本旅客鉄道(株)
(株)久米設計	(株)I N A新建築研究所
(株)熊谷組	(株)ティ・アール建築アトリエ
清水建設(株)	日本原燃(株)
仙建工業(株)	(株)楠山設計
大成建設(株)	クレハ錦建設(株)
(株)竹中工務店	(株)工藤組
戸田建設(株)	仙台コンクリート試験センター(株)
(株)ユアテック	東双不動産管理(株)
西松建設(株)	アイジー工業(株)
(株)安藤・間	東北電力(株)
堀江工業(株)	日本大学図書館工学部分館
(株)ピーエス三菱東北支店	八戸工業大学
(株)三菱地所設計	一般社団法人
(株)梓設計	東北空気調和衛生工事業協会
東日本興業(株)	東北芸術工科大学
(株)昴設計	山形県立図書館

一般社団法人 日本建築学会東北支部

支部年報第 42 号
2022 年 5 月 14 日発行

編集責任者（図書情報担当常議員） 高橋 岳志
